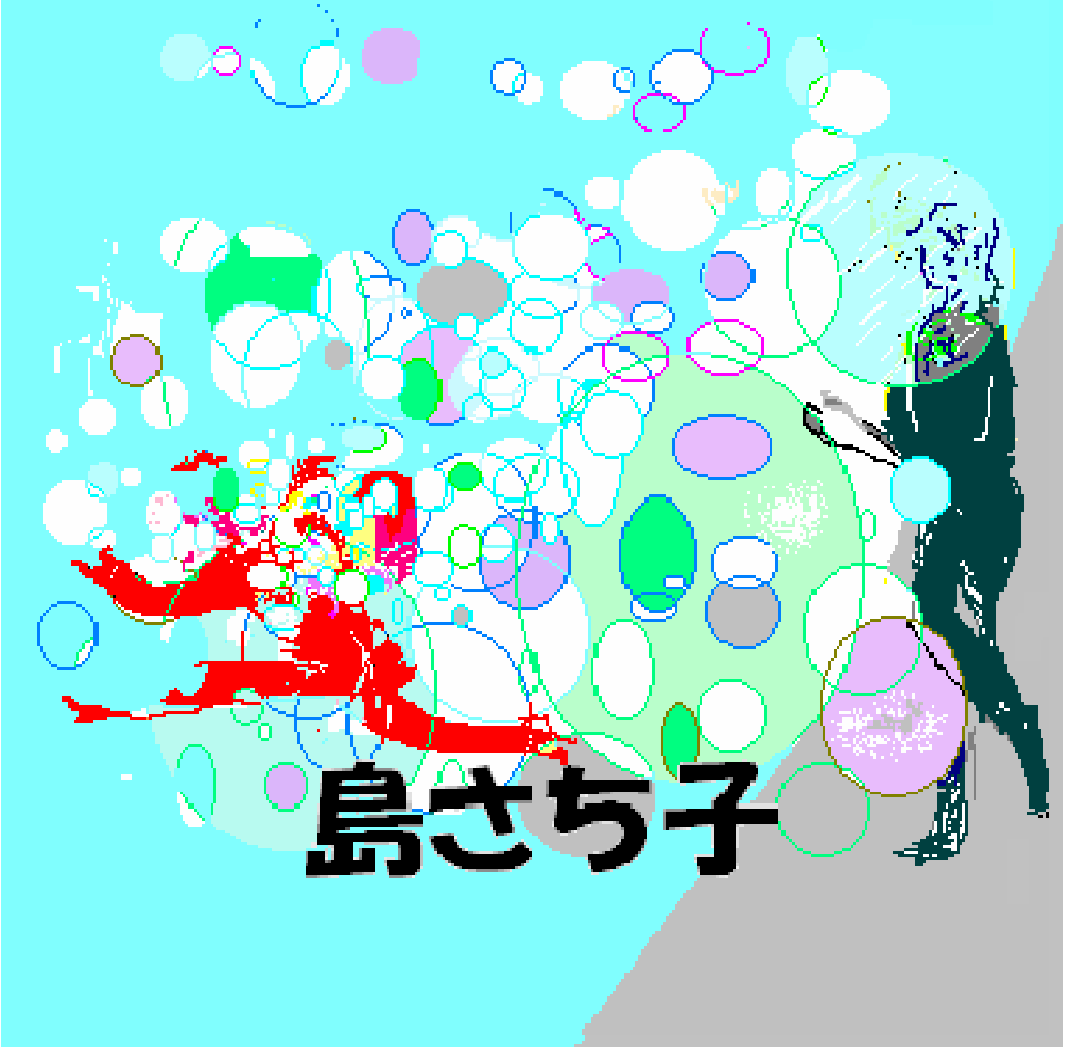
サンフランシスコベイに捨てろ！！



島さち子

サンフランシスコ

ベイに捨てろ！

装画　島さち子

サンフランシスコ・ベイに捨てろ！

爽やかな風が耳もとを過ぎるが、空気が乾燥しているせいか、かすかに喉が痛くなる。ガレージセールで買った中古自転車で走ると、セコイアやフェニックスの緑に、赤い瓦の校舎群がみごとな調和を見せて続き、生物学科の教室から正門まで、二キロ、それから、ムーンパークまで、同じくらいの距離だ。時々リスの飛び出してくる道路をバイクラインに沿って大きくカーブすると、煉瓦造りの小さな家が見えてくる。

芝生のなかで、ブルーやピンクや白がもつれ合い、転げ回っている周りで、子供たちが友達の名前

を叫んでいる。モネが近づいていくと、不思議そうな薄色の目を見張って遊びを中止した。五歳から八歳くらいの白人の子供たちだ。

ソバカスの浮いた年かさの少年が大きく頷き、手で合図すると、子供達は二人と、四人に分かれた。ドアを叩く、もちろん戸はない、あるつもりだ。

「こちら、ポリス・デパートメント、開けろ！」

ドアの中らしい四人がピストルをかまえる。周囲の少年たちが位置についた。

「無駄な抵抗はやめろ！　おまえ達は包囲されている」

ソバカスがドアを蹴った。

格闘。女の子が二人、両手をあげて出てくる。ブロンドとソバカスは、男の子を一人づつ捕らえた。四人は後ろ手にくくられて、一列につながれ、うなだれて歩く、芝生を一周した。真に迫っている。

モネがガレージに自転車を入れると、子供達は走りよってきて、口々になにか囃すのだが、早くて意味がわからない。

そのとき、隣りに住む、ナタリー、ハーストが駆け出して来て、手のひらを前に向けて押し出すと、子供たちは、何をおもったのか一斉に逃げ出して行った。

「あら、杏平は、一緒じゃなかったの？　モネ、子供達のこと気にすることはないわよ。あなたの庭

でポリスマンごっこをやったからって、どうってことないんだから……」
ナタリーは慰めの言葉をかけてくれるが、言葉に反して、顔中の皺が、どう見ても大笑いしているようにモネには見える。老婆の独り暮らしの退屈しのぎにはなったのか、ナタリーは生き生きとし、モネの開けたドアから、中を覗き込む。
「大分、部屋らしくなって来たわね。家具が必要なら物置に入っているよ。何でもあるから、見にいらっしゃい。遠慮することはいらないよ」
ナタリーは物置までモネを引っ張っていく。比較的趣味のよい家具が堆く積まれている。欲しいものもあったが、ただで貸してくれると言うのでは、かえって言い出しかねた。

「まだ小道具は揃っていないから、お借りしようかな？　ねえ、ただなのよ！　杏平、借りて来てよ」
モネは衣装ダンスに彼の上着を吊るしながら言った。
「ナタリー・ハーストはかなりな年齢なんだろう。物忘れもし易いし、貸すといっても言葉のとりようによっては、どんな風にも解釈できる。貸したものを盗ったなどともいいかねないよ」彼がたしなめる。
「言葉といえば、わたし、英語学校に通よってみようかな。いいでしょう、いっても！」

モネが思い出したように、杏平に向き直った。
「今日、ワーク・ジョブを、始めて覗いてみたの。コーヒー・ブレイクの後の一時間は活発な討論が続いていたわ。速い英語でお互いにまくしたてるから、聞いていてもわたしにはよくわからなかった。さっきも子供たちの囃し立てる言葉がまるで分からなかったし……」
「若い学生のなかにはひどい言葉の奴がいてね、僕も始めは質問の意味がわからなくて苦労したよ。すごく早口で、奴等は僕が日本人と知っていて、わざと、わからないように質問しているんじゃないかと、勘ぐってみたけど。ここの教授たちも若いものの言葉はわからないと嘆いていたよ。そのうちにヒアリングにも慣れてくるさ。どんな人種も住んでいる国なんだよ。インド人はダダダダダ、フランス人は、ファファファファファファ、なんかみんな訛りのある英語を話しているなあ。モネは日本でアメリカ人にアメリカ英語を習ったんだ、あとは色んな個人の癖に、どこまで慣れるかだな。モネほどの語学力があればさあ、大丈夫だよ。僕よりうまいくらいだもの」杏平がモネの長い髪をなでながら言った。客員教授と大學院生の差はあっても、同じ悩みを抱えているのだ。
「だから、助け合って行こうな。二人だから何とかなるさ！」杏平がモネを引き寄せた。そのとき、寝室の方で物音がした。きしむとか、はずれるとか、こすれるとか、中途半端、宙ぶらりんの音。
モネは一瞬、幸せが色あせていったような気がした。

寝室の窓は閉めてあり、別に変りはないが、衣装ダンスの扉がわずかに開いている。中に何枚かの杏平とモネの服が淋しそうに吊り下がり、下にはハンドバッグや旅行鞄、洗濯物の篭が投げ込まれている。

扉が甘くなっている、造りつけの衣装ダンスの扉は上の方で食い違っていて、彼が力一杯持上げると、かちりと音がして閉じるが、手放すと、また元のもくあみ、上の板がドアの付け根の部分で、五ミリほど前にせり出しているのだ。彼は文鎮でとび出している部分を打ち据えた。反対側がとび出して来る。彼はそれをかたかたさせながら引き出した。四センチほどの厚さの板が衣装ダンスと天井の隙間をふさいでいたのだ。

「設計のミスかな？」

モネは隙間を覗いていたが、やがて新聞紙の塊を引っぱりだして、下に落とした。板は隙間をごまかすために、はめ込んであったらしい。

「アメリカ人は万事大雑把だからな」

杏平は左右反対にして差し込んでみる、今度はしっかりと扉が閉じた。二人はほっとした顔を見合わせた。サンフランシスコ・ベイ・エリア。ムーンパーク・パウエル通り４。

ここは、ふたりにとって、始めての愛の巣だった。

日本を出るとき、榛名杏平は見送りに来てくれた家族とごく親しい友人を空港のレストランに招き、モネを妻だと紹介した。そして皆が納得のいかないうちに、ハネムーンに飛立つように、この国に来てしまったのだ。父母にも友人にも相談はしていない。渡米の前日、婚姻届は二人で役所に提出した。結婚のための行事はそれで総てだ。

二人が知り合ったのは八年前、南雲モネが中学生、榛名杏平が大學生のときだった。駅の構内で杏平は三角形の皮製の小銭入れを拾った。それには現金三百五十円のほか、めぼしいものは何も入ってはいなかったが、東京駅のなかを探し回った末、遺失物係をようやく見つけて届け出たのだ。二三日して、思わぬ訪問者が杏平の家にケーキ持参で現れたとき、彼はどぎまぎした。三百五十円と財布を取戻したとは言え、往復運賃に千円以上のケーキをプラスしたのでは、とても採算が合うまいと思ったのだ。

少女は大人になったら、どんなにか美しくなるだろうと期待させる多くの美点をもってはいたが余りにも幼くみえた。その後、時々勉強を見てやるようになり、高校入試、大學入試を突破し、やがて

毎週逢うようになった。八年間、長い時間をかけて杏平はモネの成長を見守ってきたのだ。形式はいらなかった、二人にとっては実質だけが問題だった。

モネは少女らしい好奇心から祖母の形見の小さな財布を拾って届け出てくれた人の顔が無性に見たくなった。他人から見れば見捨てて当然の、何処にでも転がっている財布だった。見捨てても良心の呵責などとは無縁な小銭入れ一つ。それが運命をきめたのだ。モネは一人っ子だったから、杏平と話していると、兄を得たようで楽しかった。高校生のとき、父は相場で失敗して蒸発し、母は結婚指輪こそ女にとって不幸のはじまりだと言いつづけて、モネが大學四年のとき交通事故でなくなった。世間の常識からすれば小額すぎる補償金も、彼女にとっては、一生手にすることの出来ないほどの大金に思えた。たった一人の肉親を売って金を手にしたような辛さがあって、一円もつかえずにいた。不幸な結婚をした母の気持ちを推してみても、この金を世間並みの結婚式や、披露宴などに使う気にはなれなかった。使うとすればもっと有効な使い方をしよう。できたら彼と一緒に外国に留学したいと思い、外国語の個人教授を受けていた。

杏平が大学院のとき、著名な経済学者、スチーブンスン博士が来日した際、夫人が雨で困っているのをみて彼が傘をさしかけたのが縁で、夫妻と知り合い、将来M大學に留学するよう勧められ、ふたりでそれを夢見てきた。今回、所属している経済学研究所から、客員教授としてM大學に派遣される

ことになり、大学院で学ぶことになったモネと一緒に成田を飛びたった。
留学しても日本人だけと交際し、日本を思い出してホームシックになり、手紙を書き電話をして帰国する、そう言う生活だけはしたくない。アメリカ社会を中から体験すること。その為に住居選びは時間をかけて選ぶことにした。二人は毎日、タイムズ・トリビューンを片手に、赤い鉛筆をもち、貸しアパート欄をみながら、ハウジング・オフイスに電話をして過した。信用期間と値段と間取り、大學からの距離、交通時間など、なかなか希望通りのところがみつからない。その上、いかさまコンピュター―の情報屋に引っ掛って、情報料百ドル巻き上げられ、行ってみると会社名が変わっていた。そんな苦労の末、はじめて二人の住居を獲得したのだ。

「おれだ！　ジョーだ！　ローザ元気かい！　ジョーだよ！」
入居して五日目の真夜中、玄関のドアが叩かれていた。太い声。眠気が綿帽子のようにかぶさっていたが、モネは目の開かないまま、隣りに寝ている杏平を揺すった。

ローザとか、バーバラとかが、此処に住んでいると思っている男が、ドアを蹴り上げているのだ。
杏平が耳打ちした、
「見てくるよ、ちょっとだけな」
「わたしも行く！」
足が震えた。震えが背筋を登ってくる。二人は玄関の方に注意を払いながらガウンを羽織り、ゆっくりとドアに近づいていく。覗き窓にとりついた。「黒人だ」彼が囁いた。
玄関の照明の下にちぢれっ毛の黒い男が立っている。笑っているような白っぽい厚い唇にウイスキーの瓶が逆立ちしていた。赤いレザーのジャケットに黒白のチェックのシャツ、酔眼が二つ焦点も定まらずにゆらゆらしている。
あんなに大きな名札をメールボックスに貼り付けておいたのに、意に介していない、と言うのは文盲なのか？　顔が寄って来る、鼻が大きくなって覗き窓を埋めた。動くと鼻で光がはねる。モネは覗き返されているような怖さで、ドアに背をつけたまま立ちすくんでいる。
杏平は首を激しく横に振り、ベッドに戻るように彼女をうながした。ドアを叩く音がひときは激しくなる。
「何をしているんだ。バーバラ、ジョーだよ、早く開けな。ジョーのご帰還だよ」

ジョーが外からドアを叩くのをやめると、モネのふるえがドアの内側を叩き、次の瞬間、杏平に引っ張られてドアから飛び退いた。
ドア一枚はさんで息づまるような沈黙がつづく。モネはローザでもバーバラでもないから、黙っている。男の声がみぞおちに一発パンチをくらわせるように響いた。
「わかったよ、バーバラ。誰と寝ているんだ！　この淫売！！」
今度は鍵ががちゃがちゃしている。杏平がモネを背に回した。
ドアが開き、男が飛び込んでくると、壁に背をつけて素早く拳銃をかまえた。
「だれだ、そこにいるのは！　バーバラ、顔を出せ！　動くと撃つぞ！」
ふたりは庇い合いながら衣裳ダンスの方に後退した。男の手が壁を這い、照明のスイッチを探っている。
「なんだ、てめえは？　ジャップか？　畜生！　後ろに隠れているのはバーバラだな、バーバラをよこせ、よこさないとぶっぱなすぞ！」
「ちょっと、待て！　何を勘違いしている？　これは、僕の妻で、バーバラではない！　僕らの家に勝手に入ってきて、何たわごとをいってるんだ！　きみは酔っているね。ここは僕ら夫婦が借りている家だよ」杏平は男の気を鎮めるように、ゆっくりと、しかし、響く低音でいった。

「何だって？　ここはローザとこのジョーが半々に借りているんだ。家賃も半年先迄払らってある。本人の知らないうちに、二重三重に賃貸できるはずがないじゃないか」
「酔ってどこかの家と間違っているんだろう。そうだ、冷たい水でも持ってきてあげようか」杏平がいい終わらぬ前に男はテーブル上の水さしから水を呑んだ。水で男の唇が光っている。
「おまえ、誰と契約したんだ？」
「ボヴ・ウイリアムズだ」
「文字がよめないのか？　だまされたんだな。ヘンリー・ウイリアムズが家主なんだぜ。ここに置いた荷物をどこへやっちまったんだ。ローザのやつ！　まあいいさ。後で話をつけようぜ。退いてろ！おれは探しものがあるんだ。そこ、その衣裳ダンスだ。退かないと、今度こそぶっ放すぞ！」
　ジョーは衣裳ダンスの扉を乱暴に開け放った。隅に入れておいた旅行鞄や、ハンドバッグを足蹴にする。鞄は化けそこねた二枚貝のように床に転がり、ぶざまに拡がってしまう。その上に洋服が一枚ずつ叩き落とされる。このとき漸く、モネの声が出た。
「何をするの、わたし達の物に触らないで！　汚い！」
「汚いだと！　この売女が！　がたがた言わずに、そっちの部屋で待っていてもらおうか。電話をしたらぶっ飛ばすぞ！」

下手に動いて命を落としては何にもならない。二人はリビングに後退した。後退するとき、ジョーが衣裳ダンスの中に入って行くのが見えた。
「畜生！　ない、盗られた！」
ジョーが、リビングにいる二人に向かって近づいて来る。
「おまえ等だな、おれの宝物を盗りやがったのは！」
何を言っているのだろう。ジョーは銃の狙いを、ぴたりと杏平に合わせた。
「そんなもの知らないよ！　僕らは掃除してあるカラッポになった、この家に入ったんだ。盗るもとらないも、何のことかわからないな。僕らには関係ないことだよ。出ていってもらおうか。不法侵入は罪になるんだぞ！　その位は知っているんだろう？　僕が嘘をいっていると思うのなら、何処を調べてもいい、いいが、ないものはない。僕らの荷物は衣裳ダンスの中と、机の引出し、それに本が数十冊、調べて早く出て行ってくれ！　眠いんだよ！」
杏平は相手をからかっているのではないかと思うほど度胸が坐っている。モネは驚嘆の目で彼を見上げ、胴に巻きつけた細い腕に力を込めた。
「わかったぞ、その女が身につけているんだな！　そうか、おまえは、女が身につけているのが一番安全だと思っている時代遅れのかたぶつかい！」

男はソファを飛び越えると二人の間をわけた。モネのガウンが襟首で引っ張られる。ガウンが剥ぎ取られ、男の手が素早くパジャマの上を下りていく。
「ケッ、ケッ、ケッ、ケ、ケ」男は喚くように鼻を蠢かせる。
「何をするの！　わたし、何にも持ってなんかいない！」モネの喉から悲鳴が吐き出される。
その時、杏平の投げたガウンがジョーをすっぽり蔽ってしまう。素早かった、ジョーがもたついている間に杏平は腕のなかにモネを取戻していた。
「調べたいなら、俺の方も調べたらいい。パジャマの下は裸だ」
杏平は胸をはだけてから、裸足の足を上げてみせる。
「前の住人の荷物なら、そこの倉庫にあるらしいぞ。捜しものがあるなら、ナタリーか不動産屋に聞いたらいいだろう。こっちはお門違いだ！」
「ふん、いい加減なことを言うと、この綺麗なねえちゃんを戴くことにする。いいか！」
ジョーはピストルの台尻を杏平の頬にぴたぴたと往復させる。飛び掛っていこうとする彼の腰にモネは必死でしがみついた。そんなことをしたら死んでしまう。こんなことで死んではいられないのだ。
ふと、ジョーの動きが止まった。ナタリーの声が聞こえたような気がする。モネは素早く玄関のドアにとりついた。

「誰かと思ったら、ジョーじゃないか！　この真夜中、派手なことをしてくれるね。ローザやバーバラなら、もうここにはいないよ。あんたもあの娘たちと一緒にポリスに連れていかれたんじゃなかったのかい。あの娘たち、それっきりだよ。知らなかったの？　このあたりは煩いんだ。騒いでまたポリスに掴まりたいのかい。もうすぐポリスがくる。今頃電話が殺到している頃だよ。わかったら、早く逃げるんだな」

「ナタリーか、てめえだな。おれの物を盗んだのは！」ジョーがピストルの手を伸ばした。

「何のこと？　麻薬でも隠しておいたのか？」ナタリーの声が低くなった。

「麻薬だと！」ジョーが呟いた。

「バーバラが帰ってきたら、ジョーが待っている、そう言ってくれ。忘れずに言うんだわかったな」ジョーがナタリーを突き飛ばした。

ジョーの足音がだんだん遠のいていく。生き延びたのかもしれない。

「ナタリーが来てくれなかったら、どうなっていたかわからないな」杏平がナタリーを助け起しながら言った。

三人は取り止めもなく笑ったり、泣いたりした。ベッドルームは混乱をきわめて足の踏み場もない。衣裳ダンスの引出しも全部かき回され、衣類や貴重品が放り出されていた。

「もう、これで来ないでしょうね」モネが言った時、何処からか轟音が近づいてきて、一瞬、言葉も心配も砕け散った。家ごと轟音に揺さぶられ、今度こそ終わりが来る。

「ミバエ、地中海ミバエの駆除が始まったのよ。毎週火木の二日間、夜中から朝にかけて、ほぼ一時間。その間は窓を開けないように、耳に栓をして眠るように、テレビで言っていたわ」ナタリーが笑い出した。

モネが窓から空を見ると、闇の中、白い粉がベールになって吹き飛んでいくのが見えた。

ナタリーはモネの頬にキスし、杏平の肩を派手に抱いてから帰って行った。

「思い出したわ。ああ、そうだったんだ、あれは……。今日ね、帰ってくると近所の子供達が、家の庭で、ポリスマンごっこを始めたの、それが真にせまっていて、何かこう悪意を感じたの。とても変な気がしたわ。ナタリーは気にするな、どうってことないんだからと、言ったけど、わたしははじめ人種的な偏見でも持っているのではないかと思ったんだけど、何のことはない、先住者がポリスに逮捕されていたのね」

「じゃあ、子供達がモネに知らせていたんだよ。注意しろって、警戒警報を発していたんだ。そう言えば、この家を下見に来たとき、モネも覚えているかな、あのとき、ドアに貼り紙があって、たしかポリス・デパートメントという字が目に入った。案内人にせかされて中に入り、清潔で思ったより広

くてさ、手の届く家賃で、なんだか夢中になっていたものだから、帰るときも貼り紙を読まずに帰ってきてしまった。防犯運動のなにかかなとも思ったりしてさ、忘れていたけど。今にしておもえば、あの案内人は、それを僕らに見せたくなかったんじゃないのかな。いつも前に陣取って見せないように工夫していた」

「ということは、どういうことかしら？」案内人はドアマンみたいにドアを背にして立っていた。あれはポーズで眉唾だったのかもしれない。

「二重契約とはね。朝になったら、ハウジングオフィスに電話しよう、とにかく、これ以上あんな奴らに踏み込まれてはたまったもんじゃない！　命なんて幾つあっても、足りなくなる」

「なんてことかしら」モネは目を閉じ、ベッドの上で体を反転させた。ケッ、ケッ、ケ、ケ、ジョーの顔が迫って来る。モネは必死ではらいのけた。

「モネ！　ちょっと、わたしの家に泥棒に入って下さいな！」外からナタリーの大げさな声。モネ

の心臓が飛び上がった。キイを中に置いたまま外出してしまったから、窓から入って玄関ドアを中から開けて欲しいというのだ。
「キイを置いて外出したときの用意に、この窓には鍵をかけておかないのよ」
「無用心だわ」
「モネはポリスみたいなことをいうのね。今はなんにも置かないから、大丈夫。モネ、これが長生きのコツだわよ、覚えておきなさい。わたしは八十二歳、元気なものでしょう！」
その年齢で、この姿勢のよさ。それより何より、この陽気さに圧倒されてしまう。モネは身軽に肩より高い細長い窓に登りつき、内側にするりと落ちる。壁の写真や絵や壁掛けが目に入ったが、大急ぎで玄関に回った。モネの家のドアと同じで閉じれば自然にロックされてしまうから、鍵を置いて外出すると入れなくなるのだ。
「すぐ、この間まで、自分で入れたんだけどねえ、今は大事をとっているのよ。骨折が怖いと周りがうるさくてね。この前はローザに頼んだけど、あの娘どうしているかしら？　ポリスに連れて行かれっちまって、帰って来ないのよ。いいえ、何も悪いことをしたんじゃないと思うわ、ただねえ、この町の住民感情を刺激しただけなのよ。ローザはカウンセラーをしていて独り暮らしの老人の話相手をしていたのよ。優しくて親切でね、それが縁で彼女達わたしの隣りに住むことになったんだけど、逮

捕されたのは黒人なんか集めてランチキパーティをやらかしちまったせいなのよ。その後で警察が立ち入り禁止の張り紙を貼っていったわ。このあたりの白人達はこの町を上品な住宅地にしておきたいというのが念願だから、黒人や、有色人種の行動にとても敏感なのよ。すぐに警察に通報するから逮捕されてしまったわ。モネも有色人種を集めてパーティをやったりしないようにね。モネたちは大學のスタッフだということで、白人は安心しているんだから。でもねえ、わたしは馬鹿な白人と違って肌の色と関係なく、人間同士つき合えると思っているわ。世界は一つよ！」

「ジョーがきても、立入り禁止でも、わたしたち此処に住んでいてかまわないのかしら？」

「そうよ、きまっているじゃない。家主にとって不都合な事件を引き起こした場合は、追い出すことができると、契約書に書いてあるのよ」

ここには、先住者の恨みが残っているのだ。

ナタリーはファースト・ハズバンドやセカンド・ハズバンドのこと、別居している息子のことを話したいだけ話すまでモネを捕まえて放さなかった。こうみえても、二回の離婚の慰謝料が相当な額になっているのだと口を滑らした。滑らせたと見せて、自慢したかったのだろう。

「モネも、ただで起きては駄目よ。どんなときでも」ナタリーの腕のなかでモネは息が出来なくなる。

杏平との待ち合わせの時間だ、モネは焦っていた。

時計は午後十時を回っていた。もう、四時間、サンフランシスコのボブ・ウイリアムズの屋敷の脇に車を停めて帰りを待っている。霧が流れているが今更諦めて帰るわけにもいかない。この交渉のために既に前日を無駄にしていた。ハウジング・オフィスに行ったが会社の物件ではないと突っぱねられて話しにならなかった。社長個人の物件だというのだ。車が反対側で停車した。杏平が飛び出した。二人の男が屋敷に入っていく後ろ姿が見える、黒と白だ。エンジンは吹かしっ放しになっている。モネが身を乗り出すと、今度こそ本物のボヴ・ウィリアムズの高級車が音もなく入ってきた。車から出る頃を見計らって杏平とモネは彼に駆け寄っていく。

「入居してから、安全を脅かされ続けています。昨日は侵入してきた黒人の男に、ピストルを押し付けられ、家中を荒らされました！　先住者の契約も切れぬままに僕と契約したんじゃないのか？　それでは、いかさまじゃないか！　しかも、案内人は警察の立入り禁止の張り紙を故意に剥いで僕達の目に触れさせないように策謀したんだ！」

杏平は、一歩前に出た。興奮していくのを押えるように、モネが必死で杏平のジャケットを引っ張る。ボヴ・ウィリアムズは百九十センチはある長身を屈めて、気難しげに聞いていたが、すぐに、商売用の笑顔に戻った。

「あなたは興味ないんですか？　サンフランシスコのフォーテイナイン・イヤーズが勝ちましてね、フットボールのためにサンフランシスコ中が、健忘症になっているんですよ。ジョーといえばジョーモンタナ選手しか思い当たりませんな」彼は大袈裟に肩をすくめる。

こっちは生命の危険にさらされているんだ、フットボールで茶化されてはたまったものではない。杏平はそれを無視した。

「とにかく、何とかして下さい。変わりの住居を斡旋するか、ムーン・パークの家で安心して住めるように手を打つか、敷金と、一ヵ月分の家賃を返すか、どちらかにして下さい。僕独りならともかく、これでは妻が気の毒ですよ。どんなに夢を描いてアメリカにきたことか、あなたはそれを木っ端微塵に破壊しようとしている！」

「なにしろ、あそこは息子のヘンリーの持ち家でして、先住者の契約がどうなっていたか、そこまでは……、私の方では良く分からないんですよ。息子のためにも悪友を遠ざけるため、良い方に借りて頂いたと喜んでいたんですが。そうですか、それでは改めてヘンリーと相談いたしまして、一日も早

く何とかいたします。それで、如何ですか？」ボヴはモネに微笑みかける。
「この間の契約の時は、ヘンリーはアフリカだとおっしゃったじゃありませんか、もう帰ったのですか？　帰ったのなら、会わせて下さい」
「ああ、明日帰って来るんですよ。丁度よかった。それでは明日相談いたしました上で、お電話をさしあげましょう。それで如何ですか。そのジョーが、なんであの家を探し回ったのか、私には想像もつきませんよ」
二人の怒りに気押されたのか、ボヴは問題を先送りにした。ボヴの後ろから杏平とモネは彼の家の中へ押し込んでいく。
「確約が欲しいんです。だまされてきたのはこちらなんですから……」
この建物は、外観の立派さにくらべ内部の造りがちゃちな気がする。これこそ、いんちき不動産屋らしさなのかもしれない。
「こりゃ、誰だ？　ヘンリーかな？　ヘンリーが帰った？　ワイフがいなくなったから、ヘンリーが現れるんですよ。二人は犬猿のなかでしてね、いいえ、僕は離婚したばかりなんですよ」ボヴは高々と笑い、ひどく楽しいことに出会った子供のように二人を振り向いていった。
「ヘンリーのやつですよ、二重貸しをしていたのは……。今奴を捕まえて来ますよ」と言うと、テー

ブルの上に投げ出されていたヌード雑誌を鷲掴みにして隣の部屋に入っていった。杏平とモネは全神経を耳に集中する。遠くから来る空気の動き、モネは何処かに何かがひそんでいそうな気がした。
「いずれにしても本当の家主がヘンリーだと言うのだから、彼に聞いてみる必要があるんだよ。心配するな、大丈夫だから……」杏平がモネの手を痛いほど握り締めた。
奥の部屋の中で人の動く気配がした。口を蔽っているような低い声。
「宝石が紛失したんだ。盗ったのはお前だな。早く出せよ。何処に隠した！」
突然、銃声が響いた。格闘でもしているのか、うなり声が入り混じる。
「何をする、そんなもの知らない。どうして、そんなものをお前が持っているんだ。その方がおかしいじゃないか！　どうして、それを、おれが盗ったことになるんだよ、ええっ！」
ボヴが鋭い口調でいった。
「時価、数百万ドルの宝石がなくなったんだよ。分かっているんだ、返せ！　返すんだ！」
「冗談だろう、え？」
ボヴの声がとぎれとぎれに聞こえた。銃声がもう一発聞こえ、更に一発鳴り響いた。モネは銃声のしたほうへ身を乗り出していく杏平を、必死で押えてもみあう。
「危ない、あれはジョーの声よ。低い声を出しているけど、わたしにはわかるわ」

みな言わないうちに杏平が肩越しにモネの唇に二本の指を押し当てた。
そのまま音が止んで、動物のような荒い息づかいが聴こえてくる。杏平は強い力でモネをはねのけようとした。
「いけない、相手は拳銃を持っている、この間のようにはいかない、もう撃っているんだから……」
モネが言うまえに、杏平はボヴの入っていったドアにはりついた。モネは震えながら、その後にへばりつく。口をふさいでいるようなもう一つの声が聞こえた。妙にかん高い声だ。
「ここになければ、銀行の貸し金庫かな？」
モネが杏平にとりついて、彼がかすかにドアにぶつかった。
「人がくる、逃げよう！」
もう一つの声がした。金庫の錠を壊したのか火薬の臭いが漂ってくる。鍵穴から覗くと、金庫が開かれているのが見えた。
杏平がドアを細めに開けた時、庭に面した高い窓から、二人の覆面強盗は体を翻して出るところだった。ドアのそばにボヴ・ウイリアムズの頭があり、どうやら、息絶えているように見える。杏平はそれを跳び越え、彼らの出て行った窓に身を寄せる。植木に遮られて見通しはきかない。
ボヴ・ウイリアムズは右手にピストルを握ったまま頭を貫通され、顔の半分を吹き飛ばされていた。

あたりに肉片が飛び散っている。撃ったために撃たれたのだ。ショックが体を貫いていった。
「怖い、早く此処を出ましょう、誰か来たらわたしたちが疑われる」
「でもこのまま逃げたら、言い逃れが出来なくなるんじゃないか？」
杏平がボヴの瞳孔や脈を確めている間、モネは世慣れた強盗みたいに、ハンカチを取り出して、ドアの把手に被せて指紋を拭いた。
「この家の人が来るわ、早く逃げましょう！」
杏平が電話に近づくのをモネは体でさえぎった。
「今になっても誰も現れないところをみると、奥さんは離婚したんだし、使用人もフットボールに浮かれているんじゃないのかな。金庫がからになっている所を見ると、これは物盗りの玄人の手口だね。警察で把握している前科ものさ。間違われる筈ないと思うけど？」
そうはいっても抗議をしにきた相手が殺される現場にいたのだから、身の潔白を証明する材料もない。一応は疑われる、まして外国での煩わしさを考えれば、ボヴの死体につき合ってはいられないのだ。
「だめ！　早く！」モネは杏平を死にもの狂いで引っ張って玄関から出る。空にはミバエ撲滅のヘリコプターが騒音を響かせていた。彼らはこの時間を選んだのだ。木曜日だった。とにかく、早くここ

から離れなければならない。幸いのことにヘリの音で、銃声も、杏平の車の音も聴かれていないだろう。

杏平の運転する車は湾岸沿いの高速道路を猛スピードで突っ走っていた。なんとしても事件に巻き込まれるのだけは防ぎたいとモネは思った。全く、杏平ときたら、何を考えているのか……、無謀すぎる。わたしがいなかったら今頃どうなっていたことか。しょうのないひと。モネが首を振ると、眠気が幕を落としたようにやってくる。もう駄目！

杏平が目を覚ました時、陽はすっかり昇りきっていた。モネは杏平の腕のくぼみに顔を埋めて眠りこけている。眠ったままベッドに運ばれた事など知るよしもない。杏平は車のエンジン音と、人声で夢を破られたのだ。そっと、覗いてみる。変わったことは何も見えない。聴こえない。

杏平は巣を荒らされた小鳥の夫婦のように心もとなかった。やはり、日本人の住むアパートを選択すべきだったのでは？　中からアメリカの生活を体験したいなどといって……。失敗だったかな。

部屋のなかはまだ整理しきれていない。胸の中を腹立たしさが渦巻いていた。ボヴ・ウイリアムズが殺されたとなれば、何時になったら二人の生活に平和が訪れるのか見当もつかない。

ボヴを殺したのがジョーであり、宝石をまだ手に入れていなければ、行方を追って、先夜のようにまた此処に現れないとも限らない。この間探していたものは宝石なのだ。この家に隠してあるのかもしれない。杏平もモネも宝石など目にしたこともない。こんな２ＬＤＫの床下も天井裏もない家では、隠し場所など限られているのだ。あの衣裳ダンスの天井の隙間。ジョーがあの夜、彼は頭の向きを変えてそっちを見た。あの男は隙間に板をはめこんで宝石を隠していたのだ。それに違いない。

しかし、あの隙間には何も入っていなかった。杏平は頭を回転させてモネを見た。ふっくらとした幼げな象牙色のモネの膚はうぶ毛が金色にもやっている。切れ長の瞼の半円に長い睫毛が青い影をつくっていた。モネの口許がひくひく動く、もうすぐ笑う。そう思った時、モネの両手が光を避けて顔の上で交叉してからばたりと開いた。どの指にも宝石も結婚指輪もついていない。そのことにびくっとする。

モネの母親は交通事故で亡くなったが、一人娘の結婚に夢は描かなかった。……わたしは結婚指輪をはめたときから、首かせ足かせ手かせをはめられてしまったのよ。若い人が首輪や指輪をはめているのを見ると可哀想になりますよ。わたしの場合は、モネを生んで太ってしまって、どうやっても指

輪が取れなくなってしまって、挙句の果て、夫に蒸発されて離婚もできずにきてしまいましたけど。指輪は自由を奪い取る、モネにはそう話していますの」と杏平に笑いながら話した、それは結婚に反対しているようにも、形式ではなく心だと教えているようにも受け取れた。といっても外国生活で、結婚指輪なしにはすまされない。杏平は二人の結婚指輪だけは、モネには内緒でも用意するつもりていた。自分たちと無縁だった宝石がこんな家のなかにひそんでいる筈もない。考えるだけ無駄におもえた。ボヴ・ウイリアムズは奪った証拠があったからこそ殺されたのだろう。いくらアメリカでもそう無意味に人を殺したりはしない。

窓を開けると、まるでサンルームだ。金曜日、杏平は外人がよくやるように上半身裸のまま日光浴をすることにしてベランダに出た。芝生の庭には誰もいない。小さな花壇には気候が春に似ているせいか春の花が咲き乱れている。庭の中央にはスプリンクラーがあり、午後三時になると水しぶきが上がる。

ロッキングチェアに掛けていると、何もかも夢のような気がする。乾いた爽やかな風、溢れる光。そのときふと、モネに結婚指輪のことを切り出し、こちらの教会で二人だけで、結婚式を挙げた方がいいのでは、と言う考えが来た。そういったら、モネが喜ぶのか、嫌がるのか杏平にもよくわからなかった。

モネが起きた時、時計の針は午後二時を過ぎていた。熱に膨張した脳がドーナツ型に宙に浮いているような、酔っ払いの気分だ。バンバンバン銃声が鳴り響く、何度でも。こんな時は日常に戻ることだ。モネは洗濯篭から、一枚ずつ洗濯物を改めながら洗濯機に投げ込んでいく。Tシャツやブラウス、下着、靴下、タオルやハンカチ類、順番に。最期の洗濯物が終わったとき、洗濯籠のなかに丸められたままの紳士用のハンカチが引っ掛っていた。モネはそれを抓み出す。見たことのないハンカチ。中から紙がはみ出している、薄汚れたグレーに白の細いストライプのシルクで、その肌触りにぞっとして取り落としてしまう。

「杏平、ちょっと、これ見てえ！」モネはベランダに向かって声をあげる。

「なに、なに、なに？」彼は危険を避ける内気な動物のように、モネの前で立ち止まる。

「これ！　見たことのないハンカチだけど、あなたのハンカチ？」

「どれどれ」彼が恐る恐るつまみあげる。目を寄せる。

「僕、こんな、センスの悪いの持っていないよ。だが、待て！」ハンカチの上から、中のものを指腹で探っていく。杏平が目と口を全開にしてモネを見た。

「まさかあ！　これが、そうなの？　」二人は口の前に指を立てると、ベッドルームになだれ込んだ。モネの結び目をほどく手が震えている。杏平は素早く窓をしめた。モネも包をベッドの中に隠すと、

玄関ドアの鍵をしめに走り、ふたりで周囲に用心深い視線を走らせる。だって、このために既に人が殺されているのだ。

ハンカチを取り除くと、一つの紙包みになった。紙包みを開けると、四つの紙包みになる。中から白いビロードの布に包まれた指輪が四つ。大きなダイヤモンドが二つ、大きなエメラルドの回りをダイヤがとり巻いている指輪が一個。どれもまるで昔の王侯貴族がつけていたと思われるほどの逸品に見える。最後の指輪は、ダイヤとルビーが三個づつザクロの実のように群がっていた。

杏平が辞書で調べている、1カラットは二百ミリグラム。五カラットとも、十カラットとも見当もつかない。二人は長い間、言葉にならない声を発しつづける。モネは棚引く虹色の雲、魔法の世界に紛れ込んで、快い興奮で身を震わせる。完璧なカット、その光の強さと美しい色合い、重み、絶妙な細工。

モネは怖くなって目を閉じる、閉じても残留する宝石の光が身体の奥底まで満たし、内部から輝いてしまうような気がする。

「イミテーションでないとしたら……」漸く杏平が口を開いて肩で息をついた。

これが人殺しをしてまでジョーが捜していた品物なのだ。見つめれば見つめる程、それを目にしていることが信じられない美しさ。或いは予めその価値がわかっていてそう見えるのかも知れない。杏

平は重量を計ったり目を近づけたりする。ジョーはこれを数百万ドルするといっていた。モネは火傷でもしたように指輪を手放し、熱っぽいかすれ声を出した。

「それにしても、どうして、洗濯篭に入っていたのかしら？」

「衣裳ダンスの隅に、新品の洗濯篭を僕が放りこんで置いたんだ。扉がきしんだとき、棚の上の隙間にはめこんであった板を抜きとったけど、モネはあの隙間から新聞紙を丸めたものを引き出したね、多分あの時落ちた。重いから真直ぐ下に落ちて、篭のなかに入ったんだ。包んであった新聞紙だけ無意識に捨てたのだろう。それにしても、あの篭を洗濯場迄持って行っていなかったら、ジョーは見つけていただろう。あれだけ懸命に捜したんだ」

「もう少しで、洗濯機に入れるところだったわ。この為にジョーはボヴを殺したのでしょう。相当な怨念がこもっているわね」

「もとを正せば、盗品なんだろう。これが本ものだとしたら、こんな、借家を根城にすることもなかった筈だが？」

「その方が追われる身にとっては、安全だったのかもしれないわ」

「いずれ、奴らが取りに来るだろう。取りに来なかったら、どうしたものかな？」

杏平は冗談めかしていう。モネはジョーが現れた夜のことを思い出してぞっとする。もともと自分

のものでもない宝石に執着するつもりはない。それなのに、どうしても、宝石から目を離すことが出来なくなっている。意識よりも本能が反応している。

モネは掌にダイヤモンドの指輪を乗せる、指は硬直し、細く集まり、掌にくぼみをつくる。小麦色の柔らかくきめの細かい掌が感電でもしたように震え上がる。杏平が慌ててモネの震えに水をさした。

「いや、本物かどうかなんて、専門家でもわからないことが多いそうだよ」杏平がモネの腕を放すと、モネは不安定な姿勢のまま、ベッドに両肘をつき全部の宝石を引き寄せた。

「何処にもなければ、ジョーは必ず此処に戻って来る」

杏平はモネの指にはめられた指輪のダイヤモンドに厳しい目を据え直していった。モネは自分のすんなりとした美しい指は、つけるべき宝石を待って、今まで裸にしておいたような気がする。母の影響もあって変なもののために指を締めつけるのは嫌いだったが、この輝きになら指が虜にされてもよいと思う。というより、そう思うことさえ、モネには不遜で傲慢に思われてくる。

「これはもとの場所に戻しておくか。多分あそこが一番安全なのかもしれないよ。ジョーがあれほど熱心に捜したあとだからね」

杏平は丁寧に一つ一つ指紋を消すように拭いてビロードの布で包み、紙で蔽い、ハンカチで結んで衣裳ダンスの隙間に押し込んだ。モネは黙ってそれを見つめていた。

モネは祝福でも受けたように楽しくなっていた。頭では宝石の美に魅せられ、馬鹿げた望みに膨らんでいく自分が恥ずかしくもあったが、この輝きで、自分が生れつつあるように思われたのだ。

警官の姿を見て、モネは急いで引き返そうと身体をひねって自転車を殆ど後ろ向きにしたが、その不自然さに気づいて、再び静かに家に向かって進んでいった。自然体でいくのよ。わかっていても、震えが隠せない。家の前に立っている二人の警官はモネをじっくり見ている。顔を向けると、さあっと黒髪がモネの顔の半分を隠した。そのまま玄関のキイを差し込む。キイを回して中に入るしか逃げ道はない。逃げ道かどうか……。ボヴ・ウイリアムズ殺人事件の容疑をかけられているに違いない。ドアを開けると同時に彼らは家の中に踏み込んでくる。そしてすぐにダイヤを見つける、言い逃れる道はゼロに近い。モネは差し込んだキイを回さずに抜き取った。

「お隣のナタリー・ハーストとは親しくしているのかね？」兎のような顔の警官が言った。

「ええ」モネは小さな声で答える。

「ちょっと、こちらに来て見てくれませんか」警官は言いながら、ナタリーの玄関の方にモネを伴なって行く。
「ナタリーは足を挫いて救急車で入院しました」
「あら、そうだったんですか？　わたし、今帰ってきたばかりで、少しも存じませんでしたわ。それで、どんなご容態なんでしょう？」
「嫌、たいしたことはないんだ……。ところで、ハースト家のこの窓、ロックされていないが、どうして、ロックされていないのかな、変だとおもいませんか？」
　モネは何時かここから中に入って内側から、ドアを開けてやったことがある。あの後、財布がなくなったと怒鳴り込まれて嫌な思いをしたが、翌日はけろっとして、
「モネ、間違いだったのよ。いやあね、わたしったら、泥棒予防に隠し場所を変えたのよ。それを、すっかり忘れていたの。年をとるって油断できないものなのね」と言ってモネの背中を力いっぱい叩いた。ナタリーの手荒い愛情表現にはついていけない。
　下手なことを言うと、身に覚えのない盗みを疑われてしまいそうな気がする。
「さあ！」モネは懸命にけげんなそうな顔をしてみせる。
「妙だな？」二人の警官は盛んに首を傾げている。こんな小さな窓一つに、どうしてこうも熱心なの

だろう。これがこの犯罪王国の警官とはとても思えない。時間をかけた末、「忘れたのだろう」警官たちは漸く結論を出した。

「あなたは隣人なんだから、ナタリーに親切にしてあげなければいけないよ。なにしろ八十五歳なんだからね。これからも気をつけてあげて下さいよ」思いがけなくて、モネは兎とピラミッド鼻の二人を交互に見た。わたしたちは勉強に来ているので、アメリカのお婆さんの世話をしに来ているわけではないのに……と不満が出そうにもなったが、思いとどまる。欠点はあってもナタリーは好ましい人物なのだ。モネは笑顔で、できるだけ様子をみると約束していた。

警官の帰っていくのを、モネは狐につままれたように見送っている。自分達が此処にきてから、どんなに恐怖にさらされてきたか訴えたかったが、どれも口に出せなかった。ボヴ・ウイリアムズ殺人事件の捜査でなかっただけでも嬉しかった。これでは杏平を取り調べに行く気配もなさそうだ。車は大學と反対方向に走っていった。急に重苦しい想いから解放される。窮地を脱したのだ。

警官を見送ったところに、反対側から赤いシボレーがはいってくるのが見えた。

「今日は！　ミセス・ハルナ」女が二人、陽気に手を振りながら近づいてくる。一人はブロンドで、一人は赤毛。その色の派手なこと、まるで大輪の花がぱあっと咲き誇ったようだ。これがローザとバーバラだった。

「あなた達のことは、ミセス・ハーストからうかがっていましたわ。わたしはモネ」
モネはうきうきした声を発している。何故そうなるのか分からないが、ローザ達は他人を明るくさせる何かをもち合わせているのかもしれない。
「モネ！　お会い出来て嬉しいわ。いまナタリーを病院に見舞ってきたところなの。彼女は元気よ。今日からわたし達、ナタリーの家に住みますのでよろしくね」
ローザは手を出した、しっかりとした大きな手。外国人の年齢はよくわからないが、三十歳位にはなっているように思われた。
青い虹彩の回りで白眼が光っている。ローザには快いうっとりするような雰囲気がある。バーバラは腕を男のように前で組んで握手もしないでローラのすることを見つめていた。
ともするとバーバラの方が美人なのかもしれない。ローザよりかなり若い。従姉妹だとナタリーが言っていたが、似ているようにも見える。
「ポリスは何しに来たの？　モネ」
バーバラが赤毛を掻きあげながら言った。
「そこの窓が開いているのは可笑しくないかって！」
二人は肩をすくめて笑った。

「お婆さんなんだから、親切にしてあげなさい、と言われたわ」
「そう、ふーん。お世話になっていたのかしら。でも、これからは、わたし達がナタリーをみます」
ローザは笑顔を引き締めて言った。ブロンドの髪に同色のブラウスを着ている。見とれているうちに後ろ姿になった。
「いいえ、お世話になっていたのは私達の方なんです」
モネはドアのキイを回しながら言った。白くつややかなドアの表面でバーバラが伸び上がって中を覗く態勢になっていた。モネが中に入ってから首を出して窺うと、ローザがナタリーの家のあの窓から身軽に入っていくのが見えた。

ホテルのパーティ会場では、シャンデリアのまばゆい光を受けて、着飾った夫人たちが動く度に、身につけている宝石がきらきらと波立ち、何本もの輝線を描いて、交叉し増幅して会場を夢と吐息で満たしてしまう。ドレスアップして来たつもりなのに、略式の着物では太刀打ちできなくて、二人は、

フォーマルな衣裳を身につけた人々をホールの隅から茫然として見つめていた。
「あの指輪を……」モネが小声でつぶやく。
「そうだなあ、あのあれを借りてくれば、丁度このパーティにお似合いだったかな」杏平が冗談を言って笑った。
それにしても、何もつけていないのはいけなかった。教会での結婚式に拘ったためにまだ彼女に指輪はあげていなかったのだ。宝石のついた指輪だって一つ位は買ってあげたいと思わないでもなかったのだが……そうだろうか……？　何だか妙な気がして杏平は額をノックする。
そのとき眼の前にモネの手がぬうっと伸びて来る。何か変にちかちかして輪郭が見えない。慌てて目を擦った。杏平は息をのむ、モネの指には大粒のエメラルドの囲りをダイヤモンドがとり巻いて細い指からはみ出してきらめいている。
声も出ない杏平の唇に、モネが微笑しながら指輪を押し当てた。
「やめなさい、返すんだ、よせよ！」杏平は必死でモネの手首を掴んで、指輪をはずすように促した。モネがこんなことをするなんて信じられない。
スチーブンスン博士が夫人同伴で近づいてくる。
「おお、ようこそ、ミセス、榛名」夫人の指輪がモネの手の中で力なく潰れた。スチ―ブンスン博士

の手は、女の手のようにふにゃふにゃ柔らかだった。博士が二人を次々に客に紹介の労をとってくれる。モネは自分でも、何時どうなったのか分からなかったが、自信に充ち、自分の容貌が美しくなったような気がしていた。

場慣れしない心細さから、杏平の腕を締め付けていたモネの腕がいつの間にかほどけ、気づくと杏平の腕の穴だけが残されていた。そちこちでシャンペンが抜かれ、杯があげられている。

日本の着物への物珍しさも手伝ってか、モネは何時の間にか会場の注目を集めてしまっていた。さっきまで他の女性達の豪華さに及びもつかないと見えていた着物がなんと優雅に見えるのだろう。杏平は豹変したモネを当惑して見つめていた。京染めの手書き友禅の訪問着に、金色の中幅の帯を低めに結んで垂らし、金色のハイヒールとバッグ。一人でも着られるようにとモネが渡米に当たって用意した唯一の高価なものだった。着物やバッグは、モネの左手の動きで起すさざ波のような光によって生命を吹き込まれていく。

たった一つの指輪の力。杏平は呻き声を押し殺して、周囲を警戒して抜け目ない視線を注いでいた。

スチーブンスン博士は上機嫌で杏平の肩を叩き、

「きみは、学界の次代を荷負うホープだし、モネは神秘的で美しい」と、最大級の褒め言葉を並べ立てた。杏平は面ばゆさで顔をまともにあげているのがつらい。褒められているのは盗品、見抜く人が

いるのではないか、盗品の正当な持ち主がこの会場にいるかもしれないのだ。杏平は肝を冷しながらモネから、目を放せないでいる。

モネは上気した膚に、かってないほど目を大きく見開き、きらきらさせて、それ自身が宝石になったように、杏平に向かって満足そうに頷いて見せた。

彼女は人が変わってしまったのだ。たった一人の肉親である母を交通事故で失って泣き叫んでいたモネは何処に行ったのだろう。あらゆる虚飾を嫌い、内面に向けていたあの聡明そうな瞳はもうない。彼女は指輪によって穢された。杏平はそう思うのだが、眼の前には宝石に浄化されたかのようなモネの姿が華やいでいた。続く広間でダンスがはじまり、スチーブンスン博士がモネの手をとった。日本人にしては背の高いモネは何と優雅に踊るのだろう。凛とした気品にみち、衆目のなか美しくきらめいて。ワルツを踊り終えていた。

他人の盗品を身につけて、モネが平気なのは杏平にその原因があるのではないのか？

二人の八年の歴史に甘えて、愛情不足になっているのかもしれない。モネの要求を察知できず、婚約指輪も結婚指輪も贈っていないのだから、形式を嫌う為だという理由も、怠惰でケチという言葉に摩り替わる。

この宝石のために既に、ボヴ・ウイリアムズが殺されているのだ。彼らの目がどこから窺っていな

いとも限らない。今日一日だけだぞ！　杏平は呟いた。
それにしても僕に相談もなしに何故身につけたのだろう。杏平はそれが不満だった。
雑誌の編集者でもあるミセス・ミューラーは、ラメ入りの黒い絹のドレスに大粒の真珠の首飾りと指輪とイヤリングをしていた。
「モネの着物も素敵だけれど、指輪は、名のあるものなんでしょう！　わたしあんなに素敵な指輪まだ見たことがありませんわ」ミセス、ミューラーはモネの方を振り向いてから感嘆の声をあげた。
「さあ、安物なんです」杏平はモネが聞いたらショックをうけそうな言葉を口にしていた。
「傷があるんです！」
「嘘ばっかり、私を警戒していらっしゃいますの？　そうよね、私だって欲しくなってまいりましたもの」素晴らしいものがあって、それが自分の所有でないことへの怒りのようなものが、そこには感じられる。
「そんな、上等なものではありません、遠目では分からないんです」杏平はむきになって言った。
「ここは東洋じゃございませんのよ。ぱあっとご自慢なさりたいことはご自慢なさいな」
ミセス・ミューラーの連れの男が彼女をたしなめた。
「彼を困らせてはいけない。若くて美しい人がつければ安物でも素敵に見えるんですよ」

「あら、ご馳走さま！」ミセス・ミューラーは漸く笑顔を取戻していった。
安物であろうとなかろうと、どうという違いはない気がする。杏平は人々の関心を少しでもかわすことができるなら、どんな作り話しでもする気になっていた。
気づくとモネが不思議そうに杏平を見ている。室内楽団のかなでるダンス音楽はタンゴに切り替わっていた。モネは杏平に向かって戻ってくる。幾分傾げた首から扇状に黒髪が広がっている。手は真直ぐ下にたらし、金色の小さなバッグをそっと支えて。

「自分のしていることが分かっているのか？」ロビーに出ると杏平はショックを隠し切れなくなる。
「きみがそんな人間だったなんて、今日まで気づかなかったな。それではきみの言って来たこととまるで矛盾しているじゃないか。指輪は嫌いだとあんなに言っていたのに」
「そうよ、そういってきたわ。でもわたしだって女ですもの、ときにはこうなんというのかしら、ぱあっと飾ってみたいことだってあるわ」

「きみも、どこにも転がってる女と同じだってわけか。他人の物にまで手を出して、ちょっと、借りましたではすまないことくらいわからないのか！」

「でも、わたし、そうしたかったのよ。それに、わたし、何処にでも転がってる女なんです。その証拠に、子供のときのニックネームはネモよ。わたしにも！　モネにも！　にもにも、にも、にもがなまって、ねも、ねも、ねもちゃんて呼ばれていたのよ。欲望のかたまりだったの。何でもかでも欲しがって、しようのない子供だったの。お父さんがいなくなって、ずーと押えられていた本性が、呼び覚まされたみたいよ。そんなモネが我慢ならないとあなたが言うのなら……」モネは想い余ったような声をあげ、杏平から身を護るように後退りした。

「そうだったの、ネモかあ！　何時も優等生ずらしていたくせに……」杏平の身体から、力が抜けていくのがわかった。

ナタリーは退院してきた。三人で陽気にやっているらしい。ナタリーの表情も一人のときにくらべて、なごやかになっていった。そんな或る日。

「バイ、バアイ！　バイ、バアイ！」
ナタリーの声に驚いて外を見ると、車の発進する音がして、ナタリーが手を振っているのが見えた。モネが開けたカーテンの隙間を目ざとくナタリーは見つける。
「モネ！　見て！　もう誰もいない。あの娘達を追い出したところよ。だってね、あの娘達のところにボーイフレンドが遊びに来て、四人で妙な言葉で、チチチチなんて話すのよ、わたしのいることなんてすっかり忘れて、わたしの知らない言葉で一晩中話して止めないのよ。うるさいから追い出しました。一人暮らしが一寸淋しいから置いてあげたのに、わたしの家だということをすっかり忘れているんですからね。もう、腹が立って、腹がたって。追い出してせいせいしたわ！」ナタリーは愉快そうにまくしたてる。
モネはよかったねと、手を振って見せる。
「モネは大學に行くから、いつもいるとは限らないんだもの、いるときは声をかけてよ」
「ええ、ローザ達、ボーイフレンドまで連れ込むなんてひどいわ。大変でしたね！」
ナタリーは約束をとりつけ嬉々として引っ込んでいった。
「それにしても、こっちの心配はそのボーイフレンドが、誰れなのかだ。この間、たしか、凄い車

に乗っているローザをロスで見かけたよ。あの運転していた男が誰なのかが問題だな。同じ人物かもしれない」杏平はふたりで昼食をしたあと、キャンパスを車で流しながら言った。
「相手がジョーなら、ナタリーは名前を言ったでしょう。チチチチって表現、何語かしら？」
「さあ、スペイン語かな？　それとも……？　考えてみれば、僕がまだ事情聴取をうけていないってのは、不自然だな、気味が悪いよ。いくら、霧が立ち込めていたにしても……」
「かといって、事情聴取が現実のものとなれば、怖いわ。無事切り抜けられるかしら？」
「それは大丈夫、だって、僕は後ろめたいことなど、何一つないもの」杏平の座高が高くなった。
「それは、ダイヤはわたしで、あなたには関係ないってことなの？」モネが聞きとがめる。
「そうだ、さし当たってそう考えることにしたよ。事情聴取されるのは僕だからね。罪悪感を持ってしまったら破滅だから、極楽とんぼでいくことにするよ」
そのほうがいいのだと割り切っていても、モネは見捨てられた気分になる。
「それは……」言いかけた言葉が喉元で戸惑っている。
「気分転換が必要なんだよ。ネモも外を見ているんだ、いいか！」
ふたりは気晴らしにキャンパス内を走り回り、思いがけなく砂漠にでていた。砂煙をあげて車を止める。何ヘクタールとも何万ヘクタールとも見当のつかない起伏のある砂漠が、向こうの小高い丘ま

で続いている。大學の建つ前、このあたりは砂漠だったのだろうか？　いずれにしても日本とはスケールが違う。

砂粒は風紋の上を、そ、そ、そ、そ、そ、と生き物のように吹き流れていく。見えるもの総てが揺らめいている薄色の世界で、ふたりは叫びをあげ、首を並べて走り出していた。

モネは夕方五時半に帰宅する。まだ陽は高い。同じ時刻に家の前に止まった車があって、女の声が聴こえた。ナタリーが外に飛び出し、大袈裟に抱き合っている。ローザとバーバラだ。ローザの大きな青い目がモネの前を過ぎるとき、ウィンクでもしているようにしばたいた。バーバラの赤毛と、煉瓦色のセーターにターコイズ･ブルーの派手なネックレスとブレスレッドが、小気味よく調和している。バーバラは何時もモネには無愛想だ。

「また、戻ってきたわよ。どんなに威張ったって、彼女たち行くところがないんだから……。この辺りじゃ誰も部屋を貸してくれはしないんだから。一度逮捕された女など置いてくれる家主はいないよ」

あとでこっそり戻って来て、ナタリーは幸福そうに笑い声をあげた。

杏平は日毎に若い学生達にもなれて、前のように何度も聞き返すこともなくなっている。ただの若い研究者にすぎない自分に客員教授として研究室や、秘書まで与えている大学側は、論文の審査を回してくる。親切にしてもらっているのだから、拒否することが難しい。いきおい杏平は家に戻っても机に向かうことが多くなる。その日は早目に研究室を出た。モネをさそって帰ろうかと思ったが、一人でゆっくり考えてみたいことがあった。あの日以来、パーティのあの宝石がちらちらして集中力をかいているのだ。

ちょっと借りただけだと肩をすくめ、それですむ問題のようにも、これからの自分達の生き方を左右する重大な問題のようにも思われる。ミセス・ミューラーの驚きから察して、あれは本物に違いない。とすると、ジョーは数百万ドルだとボヴ・ウイリアムズを撃つ前にいった。数百万ドル、これから自分が稼ぎ出すことの出来る額とはとても思えない。それが今、手中にある。杏平にとってもやはり誘惑には違いなかった。モネがその美しさに惹かれて一日位身につけていたからといって、目くじらをたてる必要はなかったのだ。他人に怪しまれなければ……。

だからといって、自分たちのために下された贈り物と考えるほど身勝手にもなれない。またその存

在によって惹き起こされるさまざまなマイナスを無視することはできなかった。
モネはこの頃、宝石について何も言わない。何も言わないということは秘密を持ち続けているのではないかと、杏平は思う。それを確めてみなければならないのだ。
モネはまだ帰っていない。車庫に自転車はなかった。杏平は空き巣に入った泥棒のように、急いで衣裳ダンスの天井を探る。パーティから帰って、確かにここにしまったのに、手は空を掴み、かすかな埃を乗せて下に落ちた。四個全部ないということは、今度こそジョーに持ち去られたということか。これでよかったという安堵感と、数百万ドルを手中にしていたのに……、みすみす犯罪者に返してやったのだという不満。チャンスはものにすべきだった。冒険を避けるべきではなかったのだと。それは少年の日の夢、あれがあるだけで幸福になれる気がするとモネは言っていたのに……。これからも学問を続けていく実直な生活、少しばかりの名誉、それを護るための途方もない損失。しかし考えて見れば、これで身の安全が保障されたのかもしれない。ここに入居以来、あらゆる悶着の原因になった宝石はもうない。モネはそれを知っているのだろうか。
「杏平、わたしの歌を聞いください！　わたしのファースト・ハズバンドから教わった歌よ」ナタリーがベランダに回ってくる。退屈していたのだろう。
「歌ですか？　」不意を襲われた杏平は老婆の楽しみをにべもなく断ることもできず、黙ってうなず

いた。
「そう、日本の歌！」ナタリーは歌い出した。
「命短し、恋せよ乙女……赤き唇……」
「びっくりするなあ！　もう！　」ファースト・ハズバンドは、昔、日本人から教えてもらったのだという。
「うまいもんですねえ」杏平が感嘆した。こんな古い歌を……。
「ローザ達にも歌ってあげるんだけど、耳をふさぐのよ。その上、家中を荒し回るの。何もかも掻き回してひどいんだから……」
「どうしてまた？　彼女達、あなたに、そんなにつらく当たるんです？」杏平が問い返すと、ナタリーの目に涙が盛り上がる。暫らく逡巡したあと、何も言わずに力なく微笑むと、気持ちを切り替えるように、背骨を立て、スキップをしながら戻っていった。

カリフォルニアの青い空も雨季に入って、時々しか姿を見せなくなった。
その日の朝は晴れていたのだが昼頃から薄暗くなって、空に雲が垂れ込め、二時頃からどしゃぶりになった。
こんな時必ず車で一緒に帰る約束だったのに杏平の研究室に何度電話をいれても誰も出ない。兎に角、先に帰ると、携帯でメールを送る。雨滴は弾丸になって打ち付け、身体がその衝撃でゆさぶられる。コンクリートの道路を雨はしぶきをあげて流れ、靴は水浸しになって流れを漕いで行く。手足が冷え、水ぶくれになってむず痒くなる。被っているコートのフードが目まで隠したり、風で脱がされたりする。
こんな心細い想いをしているのに、彼は何故、黙ったまま、何処へ行ってしまったのだろう。
先に家に帰っているのか？　モネはダイヤを小さな袋に入れて肌身につけている。胸のあたりがしきりに痛んだ。水しぶきをあげながら自転車を漕ぐ。何時もは干上がって水のないクリークが雨を寄せ集め、泡を立てて流れていた。スリップしないように、雨風に飛ばされないように、バランスを崩さずに走りつづけるのは大変だ。自転車を押し、波を蹴立てて泥水の道を脱出し、再び自転車に乗ったときは、もう、雨が降るとか、吹きつけるなどと言うものではなく、滝そのものになっていた。それでも気づいたら我が家に着いていた。まだ、彼は帰ってはいない。

何者が出没するか、不安でも、モネには屋根があるというだけで嬉しい。ダイヤの指輪の入った小さな袋をはずし、中を改めてから、ビロードで拭く。無傷だ。

テレビを入れるとドラマの合間合間に、東部や中部の記録的な積雪を報じていた。カリフォルニアでも豪雨洪水注意報が出されている。彼は帰って来ない。モネは心当たりに電話しようとしたが、回線の故障か何度かけても通じない。

警察？　モネはそんな予感もしないではなかったのに、ずっと打ち消していたのだ。いよいよ嫌疑がかかったのに違いない。拘置所のなかは言葉の通じない有色人種ばかりがぶち込まれていると聞いたことがある。モネはおろおろし、杏平の帰りを待って外を見るが、この家そのものが滝壷に浮く小箱のような心もとなさ。この雨では事情聴取が終わっても帰れないでいるのかもしれない。

モネが漸く気を持ち直したとき、リビングルームに雨が洩りはじめる。バケツを取り出そうと、クローゼットを開ける。途端、何かがモネの上に崩れ落ちた。痛い！　起き上がろうとすると、体の上に、どさっと倒れ込んで跳ね飛ばされる。見ると足許に巻き込んである毛布が転がり、毛布のめくれた隙間から黒い手がぬっと突き出ている。

モネはよろよろと後退し、テーブルにぶつかって身をささえる。暫らく震える手でテーブルにつかまったまま動けないでいる。玄関のキイを取り替えたばかりなのに、何時入ってきて死体になったの

か？　毛布をめくると血が流れていた。なまなましい赤。ジョーだ。胸を刺されている。まだ暖かいがどんなに目を凝らしても、胸の動きは見えなかった。

何かをしなければならない、どうすればよいのか。何一つ考えることが出来ないのに、気がつくと、モネは足の指にカット綿を巻いて指輪をはめ、その上をまたカット綿で蔽い、包帯をし、厚いソックスを穿きこんでいた。

モネ自身、自分の手足が不思議だった。モネはただ竦んでいるのに、思考力を持つかのように手足は勝手に動いていた。今までだって手を握り締めることで集中したり、力強くリズムをとって歩くことで足に支えられたことはある。手足は思考するのだろうか。

手足に遅れをとったモネの頭が絞り出した考えは、死体をもと通りにクローゼットの中に押し込むことだった。

モネがジョーを毛布に包もうとかがみ込んだとき、ジョーの息がモネの足許でヒューッと吸い込まれた。生き返った。生きていたのだ。ジョーの手を払おうとするが、その黒い手は払っても払ってもモネの足首を掴んだまま放さない。息はもう一度ヒューッと呼び込まれる。モネは声をあげ、足をばたつかせながら、黒い指の一本一本を全力で剥がしにかかる。

二本、三本、四本を漸く剥がし終え、見ると前の三本が強靭な鉄の爪のようにまたも深々と足首に

食い込んでいる。モネの涙が、動く度に周囲に飛び散る。
ジョーは指輪を足に嵌めるのを見ていたのだ。モネは上体を乗り出して、クローゼットの中にあった掃除機の柄を掴むと、盲滅法に、ジョーに向かって打ち下ろした。
ジョーはギャーとも言わない。足首を掴んでいた手は力なく落ちた。モネは飛び退く。今度こそは本当に死んだ。そばに寄って毛布をかけても反応はない。モネはジョーを再びクローゼットの中に押し込もうと、毛布の包の下から腕をさし込み、上体を立てようと苦闘する。何とか動かし、頭をクローゼットまで持ち込む寸前、モネは死体もろとも床に転倒している。ジョーの頭が毛布から飛び出し、モネの回りを回転する。梃子の原理を利用すればと思うのだが、丈夫そうな棒は見つからない。
殺人者は自分だ……。モネの眼球が震えながら脳天まで昇っていく。気ばかりあせり、重いソックスを穿いたまま、行ったり来たりする。
落ち着いて、知恵を働かすのよ。こめかみを押え、静かに跪いていると、頭が両膝の間に重く陥ち込んでしまう。
杏平が今、警察にいるとすれば、この殺人に関してはアリバイが成立する、それが救いだ。帰りを待ちながら、遅く帰って欲しいと祈る。アリバイのこともあるが、彼に死体を見せたくはなかった。
テレビをつける。他のことに気を紛らし、死体の存在を忘れたかった。ハワイ海域で次々生れる低

気圧がマシンガンみたいにサンフランシスコ付近を狙い撃ちにして、豪雨をもたらしている。洪水と土砂崩れで道路は寸断、汽車は脱線し、死者三十人以上、何十年ぶりで金門橋が閉鎖された。やや南部のこの付近でも、公園からトラが逃げ出したらしい、只今、全力で捜査中。これからまだ二、三日は雨が降り続くという。大雨は救いかも知れない。

こんなに雨が降っているのに、彼の車の音だとモネにはわかった。どんなに風が音を狂わしていても、彼の車の音は敏感にわかる。このアメリカで、いや、この世界中で、モネの味方は、杏平だけ、彼ただ一人なのだ。しかし、二人の間にはダイヤとジョーの死体があった。それでも、生き返った想いでモネは玄関のドアを開けた。車庫からずぶ濡れになった杏平が飛び込んで来る。

「やはり、警察だったの？」

「あちこち交通止めに合って遅くなったんだ。警察ではもう帰されないのかと心配したけど、何とか此処まで辿りつくことができた。いやあ、一時は前が見えないんでどうなることかと思ったよ」

モネは杏平に抱きついていた。拭っても拭っても涙がこみあげてしまう。いったん止まっていた震えが再び始まり彼の身体までも、がたがた震わせていた。

杏平はぎくっとして両手でモネの顔を挟んだ。

「ネモ！　どうした？　」杏平は言いながら、モネを激しく揺さぶる。

「またか？　奴等、また来たのか？　」
「あそこ……」モネはクローゼットの前を指さす。彼は怒ったようにモネを振りほどいた。素早く膝をついて毛布を剥ぎとる。
「今度は、ジョーが殺されたのか……」彼は途方にくれ、暫らくジョーの傷口をみつめていた。
「凶器は刃物だよ、でもここでやられたんじゃないな。出血が少ない。どこかから運んできたんだ」
モネは少し距離をおいて立っていた。
「勿論、僕に犯行を押しつけるためだ！　これはいかにも日本人のやりそうな手じゃないか。多分凶器は庖丁だよ」
「どうして、そうまでして……」モネの喉が裏返しになったように痛い。
「僕の研究室も引っ掻き回されていたよ。研究室にもない、ボヴ・ウイリアムズも持っていなかった。ボヴは事件で財産状態まですっかり表沙汰になったからね、売っていないことが分かったんだよ。警察が押収したのでもない。となると、仲間を疑うようになる。ジョーよりやや小柄の白人だったが……。畜生！　どこまで僕たちを苦しめたら気がすむんだ！」
杏平は両手で床を叩きつけた。モネは後ろ向きになる。
「でも、ジョーを本当に殺したのはわたしなんです！　わたしが扉を開けたから転がり落ちて、その

ショックでもう一度生き返って、わたしの足首を掴んだの。だからわたしは夢中になって、掃除機の柄で叩いたのよ。何がなんだかわからなかった。殺してしまったのはわたしで、すぐさっきなんです」

杏平は仰天していた。暫らくは身の置き所がないといった様子で部屋の中を歩きまわり、奇妙な顔つきで何度もモネを見つめる。

モネが殺したという言葉は信じられない、モネは人を殺せる人間じゃない、自分が一番よく知っているのだ、とでも言うふうに。

「きみが殺ったんじゃない。胸を刺されたのが致命傷だ。生き返ったなんて嘘だ。そんな気がしただけなんだ。爪に引っ掛っただけだろう、慌てているから取ろうとすると、ますます、こんがらがってくる。何を馬鹿なことを口走るんだ。しっかりしろよ！」

わたしは彼の描いているわたしとは別の人間になってしまったのだ。モネには彼を欺き続けているような後ろめたさがある。

「ね、見て、掴まれたあとがあるかも知れない」モネはよろけながら、足首を回した。爪の食い込んだあとが赤黒くなっている。

「これが何よりの証拠よ。ジョ―はわたしがダイヤの指輪を足に嵌めるのを見て、生き返ったのよ」観念して目をつぶり、モネは弱々しくなる。

「何だって！　きみが、ダイヤを身につけていたのか？　僕はジョーが持ち去ったとばかりおもっていた。どうしてそうやって一人で勝手なことをするんだよ。何故僕に相談できない！」杏平は語気を荒げる。暫らく沈黙が続き、杏平が身震いした。

「しかし、今、そんなことでもめてはいられないんだ。これをどうするかだ？　これからは、決して秘密を持たない。僕も、きみもだ。約束だよ！　自分が殺人犯だと責めるのは止めた方がいい、だって刺したのはネモじゃないんだから……」杏平の眉間が険しくなる。早く何とかしなければならない。

「死んだのはついさっきで、あなたにはアリバイが成立しない。わたしの罪であなたは共犯にされるかもしれない。ボヴ、ウイリアムズの事件までわたし達に押し付けられるかも知れないわ。早く何とかしなければ……」

モネはもう泣いてはいなかった。降りかかってくる火の粉は、払わなければならない。他人の意のままに殺人犯になってはいられないのだ。幸か不幸か豪雨だった。

杏平のシャワーを浴びる音も外の雨の音に消えてモネは心細くなる。ジョーもまた、宝石に魅せられていたのだろうか。こうしていると何故か、宝石が一つの味方、一つの力のように思われてくる。不思議だった。モネはベッドの上でソックスを脱ぎ、包帯をとり指輪をゆっくりと眺めた。輝きはダイヤ以外を闇にしていた。その眩さは正視に耐えないくらいだ。この永遠の輝きはわたしのもの。二

人のものだ。あれだけ彼らが捜したのに、ダイヤは私達の手にすっぽり入った。それはダイヤの意志！生き返る見込みもないのに最後に当たって、これに目をつけた悪人の執念にモネは立ち合っただけだもの。

彼は浴室から勢いよく飛び出してきて、モネを驚かせる。着替えのパジャマではなく、シャツとセーターをかぶりながら、刑事のような声を出した。

「そのダイヤとこの男を警察に引渡そう。僕らにはそれしか救われる道はないんだ。決めたよ！」

「そんなことをしたら、ダイヤを盗んだのまでわたし達だと思われるわ」

セーターから出て来た彼の顔は、今まで見たこともないほど真剣な目つきでモネを睨む。杏平が電話をとろうとする。モネはその手にむしゃぶりついた。

「わたしを、刑務所に送り込まないで！　御願い！　あなた、肌の色を考えてみてよ、日本人は黄色よ、どんなむごい判決を受けるかわからないのよ。陪審員も、裁判官も、検事も、みんな白人に違いないわ。死刑にするなんて簡単なことよ！」

「きみが刑になる筈ないじゃないか」

モネを押しのけ、杏平はダイヤルを回した。何度も、何度も回した。回線は不通らしい。

押し殺したような、笑い声が響く。杏平が振り向くと、モネが泣き笑いしていた。

「あなた、この輝きをみてよ！　こんな美しいものを見たことがあって？　これはわたしたちのものなの！　ダイヤがわたし達に擦り寄ってきている。わたし達に助けて下さい！　護ってください！　あなた達と一緒にいたいと、そう言っているのよ！　あなたには、それが聴こえないの！」
「なんだか？　欲の皮が突っ張っただけじゃないのかあ？」杏平が皮肉をこめて反発する。
「この為に、人殺しまでしているのよ。今更、綺麗事を言って、警察に出頭したって、わたし達に勝ち目はあるの、本当にそう思えるの？　真剣に考えてよ！　まずない。そう考えるのが、まともなのよ。ほら、これを見て！」
　こんな時に、ダイヤの指輪を二個ずつ指に嵌めた両足が、杏平の目の前に高々と持上げられていた。そんな挑発的なポーズで素足を彼の目の前に突き出すなど、今までのモネに考えられない行為だ。
　杏平は目を落とした。モネの腿から脛を這って、足首へと登りつめた目は、指のダイヤに吸いついた。小麦色の肌にダイヤの光芒がしっくり似合って、彼は魅せられたようにみとれていた。ブリリアンカットの高い屈折率と強い散光、虹色のファイアが彼の目をくらましてしまう。
「わたしは、自分の意志で宝石を盗んだのでもないし、ジョーを殺したのでもない。運命なんだと思うの、そう定められていたんだと。逆らえないものには逆らえない。ダイヤがわたしたちのものであることを望んでいるのよ。その証拠に電話が通じなかったじゃない。携帯も通じない」

ダイヤモンドの酔いが、モネだけでなく、杏平の血管の中へも流れ込んでいくような。何カラットあるのだろう。数百万ドル？　杏平は溜息を洩らした。

モネが彼の両手をとる。高揚していくお祭気分のようなものが伝染していく。

雨は降り続いていた。

虎が逃げていた。

洪水が各地を襲っていた。

「これは、幸運なのかもしれない。モネ、死体を捨てるんだ。どこかに……。サンフランシスコ・ベイに捨てよう！」

「そう、それしかない、雨が車の音を消してくれるわ。わたし達助かるのね！」

「そうだよ、車のタイヤの跡も、雨が降りつづけば見えなくなる。何の証拠も残らない。やるか？二人でやるなら、やれるかもしれない」

「やるわ、早く！」

驚くばかりの勢いで次の行動へと急いでいく。雨の中、二人で死体を持ち、車のトランクに入れる。人っ子一人通らず、見通しもきかない闇だった。上から降る量より、地上で跳ね上がるしぶきの量の方が多く見える。水溜りが皺をつくって車より早く走っていく。

車は何の音かと思うほど恐ろしい音を立てて走る。向こうに交通止めの信号が見える。引き返して回り道をよぎなくされた。低地を避けなければならない。速度をあげると、タイヤはシャーと水しぶきを巻き上げ、風が狂ったように吠え立てる。クリークを避けて車を走らせると、習性のように大學の方に車は走っていく。青黒い水が闇を走るヘッドライトの光の中で白く泡だっては消えていった。思わぬ深みもあって、油断すると車がずるずる水に流されてしまう。どう経巡ったのか、わけがわからなくなったころ、目の前、波打つ雨のカーテンを透かして、満々と水をたたえて、うねっているベイのほとりに出ていた。雷鳴も聞こえないのに、空には時々発光現象が見え、闇であっても、それとわかる広さと水量で湾だと推定できる。捨てるとしても注意深くやらなければならない。

ボートが一艘、木につながれているのが見えた。降る雨が筋をなして湖に流れ落ちている。ボートは水に押されて滑ったのか、鞆綱が一杯に突っ張っている。ふたりは手探りで石を拾い集め、トランクから出した男のポケットに詰め込んだあと、ボートに乗せる。

杏平がひとりでボートを押して水の中に入っていく。降りのなかで、懐中電灯のあかりが見えなくなった。

モネは車のヘッドライトを湾に向けて投げかけたまま、彼を待って、一人で闇に目を凝らした。ワイパーが動いている。僅かな扇形のなかを影がとんでくる。風雨の塊。幾つかの音としぶきが舞い上

がる。大丈夫だろうか。モネが心配しはじめたとき、フロントガラスの向こう、ヘッドライトの中に海坊主が濡れた頭を現わした。

ジョーだ。　また生き返ったのだ。杏平はいない。ジョーが生き返り、杏平が死んだ！

モネは思わず目を閉じた。しかし、落ち着いて目を凝らすと、海坊主は彼だ。ボートを引っ繰り返して全身ずぶ濡れになって泳いできたのだ。

「懐中電灯を落としてしまったよ。指紋がついていても消えるから大丈夫かな」

モネは素早く杏平のセーターを剥ぎ取り、用意していた自分のシャツとセーターと、カーデガンを着せた。何とか伸びてばんばんでも、濡れているよりは増しだ。カッパの下はブラジャーだけになった。車は湾を左手にして走る。

「ジョーは胸を刺されているから、サンフランシスコ・ベイでは永久に浮上しない。体内のバクテリアがガスを発生しても、傷がガスを発生しても、傷がガスの篭るのを防ぐから浮上しない。運悪く浮上するとしても二週間以上はかかる。それにしても運良くボートがあったものだ。水は塩辛くなかったよ、少し呑んだだけだけど、雨水だからなんだろうね。思ったより暖かかった」

車は丘陵地帯を回った、雨の向こうで赤い灯が打ち振られている。銃声がした。「ギャッ、ウォオウ、ウオゥオゥー！」銃声が続く。

「虎を追っているんだ！　今のは虎の断末魔の叫びだよ」叫びは雨を震わせて増幅する。
杏平は目を大きく見開き、顔を左右にめぐらし、曲がり角を探る。並木通りになると何とか下の道路が区別できる。大きくカーブして、ブレーキを踏むと、彼の靴の中で水がぐしゃぐしゃ音を立てた。

ジョーの死、死体遺棄、もはやネコババしたではすまない。犯人は電話線を切ったのだから、逃亡の時間稼ぎをしたとも考えられる。しかし、急がなければならない。貴重な時間が雨と共に流れ落ちていった。二人は知恵を絞った、もう、迷わない。
モネは大學で麻酔用の薬と器具を借りだし、杏平は農家をたずねていった。農場では、牛と、豚と鶏と、ほろほろ鳥を飼っていた。大規模な農場だが、ケージから逃げ出したのか、二羽の雌鳥が小雨の中地面をつついていた。杏平は新鮮な生卵を、病弱な妻に食べさせてやりたいので譲って欲しいときりだした。そこまでしなくても、新鮮な卵を配達してあげましょうと日系の女は言ったが、日本ではそうしていたのでと頼み込み、暫らくは毎日卵を生む白色レグホンだと保証してくれた。女は、暫

らくと言う時目をそらした。かまわないのだ。最初の二日か三日生んでくれれば嬉しいのだからと言うと、女は杏平の間違いを指摘し、二ヵ月は保証できると嬉しそうに言った。農婦から篭を貰い受け、一ヵ月分の餌を買って帰える。

鶏たちはダイニングキッチン。狭い篭の中でつんつんとした目つきでモネを見つめる。二羽の雌鳥は猜疑心と敵意丸出しの顔つきをしている。卵の殻をすり潰して飼料に混ぜる。厚い丈夫な殻が必要なのだ。早朝、雌鳥は二個の大きな卵を生んだ。

モネは実験動物の要領で麻酔の注射をし、雌鳥は杏平の手の中で首を捻られたように悶えてから静かになった。モネには、同類である雌に対してこんな酷い仕打をすることに後ろめたさがある。でも、ふたりの命がかかっているのだ。

指輪をラップで丸く包み、テープで止めた。傷つけないように気をつけながら、ピンセットで子宮から輸卵管に向かって、魏卵黄をゆっくりと押し込んでいく。

通常、卵巣のなかの卵細胞は卵黄を蓄積して大きくなり、排卵されて輸卵管に入る。輸卵管を降下しながら外側に卵白をつけ、子宮で卵殻が完成して生み出される。モネはM大學の研究室で実験したばかりだから迷うことはない。大学院の学生たちは想い想いに卵のなかからコインや花を出現させていた。まるで、手品か、魔法のように。あの時はもう少し軽いものを入れたのだが、指輪は重すぎは

しないだろうか？　入れた途端ぽとりと落ちたり、見事な指輪の細工がとんでもないことになっていたりしたら困る。といっても一カラットは二百ミリグラム、十カラットとしても二グラムだ。黄味より遥に軽い、あとはリングのプラチナの重量。あれからこれへと二人は取り越し苦労を重ねる。

「とうとう、やった！」二日目と三日目に二個ずつ。杏平とモネは暖かい卵二個を、代わる代わる手のひらでそっと握りしめた。冷蔵庫のなか、一列目には買ってきた卵と、一日目の卵を並べた。二列目には四つの卵が並んだ。

電気スタンドの電球に卵を直接押しつけると、リングの形が薄っすらと見えた。その感動！

「ダイヤの指輪は卵のなかに完全に存在しているわ。これで、わたし達生き延びられるのね」モネは夢中で杏太の胸のなかに飛び込んでいった。

「ネモ！　凄いな、なんだか護って貰っているのは、僕の方らしいね」杏平はモネを抱き締めながら感嘆の声をあげた。

「わたしを、ネモって呼ぶのは、パパとあなただけよ。わたしはネモ、欲望を一杯持った何処にでもいる女の子なのよ」モネは杏平の胸に顔を埋める。喜びも苦難も一緒、二人は協力者であり共犯者なのだ。モネは何だか総てがうまくいくような気がした。

「しばらくこうしておき、あとで冷凍にするか、茹で卵にして、時々熱を通して腐敗しないようにす

るかだな」杏平には二人の間に秘密のないことが何よりも嬉しい。
近くでパトカーのサイレンが悲鳴をあげ、家の前を幾つもの足音が走っていく。
「ナタリーが死んだ！」「殺されたんだ、たった一人で殺されていた！」何人かの声が重なっていた。いっせいに野次馬の列が乱れ、どよめきが起った。ナタリーの胸の中央にジャックナイフが突き刺さっている。
「ナイフが骨まで食い込んでいるので、このまま解剖に回して下さい」検死官らしい白衣の男がいった。申し送りを受けた男が刑事らしい男に何か囁いている。
「指紋は拭き取られていましたから、その心配はいりません」刑事は長い顔のそばで手をひらひらさせていった。
「死後四日はたっているだろう。隣りに住んでいて、あなたはどうして気づかなかったのですか？」
刑事がモネに向かっていった。
「豪雨でしたし、雨漏りが大変でしたから忙しさに紛れて、わたしたち……。でも、ローザや、バーバラが一緒にいた筈ですけど……。これからは、自分達がみるからと……」
「ナタリーの息子のロバートが、このところの雨でどうしているかと心配になって、今朝やって来て発見したんです」刑事の声には妙に疑い深い響きがこもっていた。

ナタリーは長々と担架の上に伸びていた。ブルーのネグリジェの胸についた紅バラのようなしみにオレンジ色のナイフのシベが突っ立っていた。警官が車から毛布を持ってきてナタリーを蔽った。どうしてナタリーが殺されたのか？　ボヴ、ジョー、ナタリー、みんな関連しているとしか思えない。モネ達にも命の保証はないのだ。八十五歳の老婆の胸に何故そうまでしなければならなっかったのか。光がちかちかし、眩暈がくる。身体中から冷や汗が流れ出し、モネは意識が遠くなって行くのがわかった。力強い腕がモネをささえ、ブランデーを喉に流し込んでいた。

「永眠するにはまだ早いぞ！」杏平の声が野次馬の笑い声に消されてしまう。

気がつくと長い雨が上がっていた。

刑事は杏平に二度もの殺人事件に事情聴取される怪しさを強調する。

「僕は日本では、生まれてから三十二年間、一度も殺人事件に出会ったことはないのに、アメリカに

来て四ヶ月くらいで、どうして二件もの殺人事件に出くわさなければならないのか、分からない。僕に言わせていただければ、アメリカは狂っているんだ！」と切り返した。それでも、杏平はジョーが何か貴重なものを捜しまわっていたこと、いま考えるとボヴ・ウイリアムズの家にボヴが殺される前に入っていった後姿はジョーと、ジョーより五センチは低い白人で、甲高い声を出したことを積極的に話した。その上、ナタリーは彼女たちが家のなかを探し回ると泣いていたことを指摘した。

「老人が殺され、貴重なものをジョーもローザ従姉妹も捜していた？」刑事は首を捻っていたが、「宝石かも知れない……、ヘヴン一三！」二人の刑事が指示を受けたように跳び出して行った。新しい展開を掴んだのか、刑事は聴取を急いで切り上げた。これで犯人が掴まることになれば、二人は安全になるのか、窮地にたたされるのか、杏平にはわからなかった。宝石、それこそ、的が定まったということかもしれない。

刑事はこのままでは済むまいという態度を匂わした。ある程度の追及は覚悟している。宝石は四個の卵の中だ。

「ヘヴン強盗殺人事件、首領は美人カウンセラーか？」

ナタリー・ハースト殺人事件を捜査していた特捜班は、被害者と同居し、事件後姿をくらましていた美人カウンセラー、ローザ・チェスター、三十歳とその従妹、看護師、バーバラ・チェスター、二

十五歳を、ナタリー・ハースト、ボヴ・ウイリアムズ強盗殺害の容疑で逮捕した。
取調べによると、二人は三年前より続発している、老人を震え上がらせたヘヴン強盗殺人事件についても一部自供をはじめている。
ローザとバーバラは、グラマーな美人であるが、カウンセラーとナースとして老人の財産に狙いをつけ、親しい男を使って老人を殺害させ、多額の財産を搾取、または強奪させ、殺害現場にヘヴンのメッセージを残していた。
ローザは長い間老人の相談相手をしてきたが、七十歳を過ぎたら天国へ、それこそが老人の幸福だと考えるようになったと告白している。
捜査本部は今までに判明した共犯者として、ジョー・ルースと共に、グレアム・ペイジを指名手配した。なお二人は四ヵ月前、一味や友人を集めて麻薬パーティをやっているところを警察に踏み込まれて逮捕されたにもかかわらず、麻薬パーティ以外の件については追及されず釈放されていた。ヘヴンのサインのないウイリアムズ及びハースト殺害事件でも宝石や証券が盗まれて換金されており、一味の犯行であるとの確証を得ている。

豪雨が上がるとカラフルな自然が一段と鮮明になって戻ってくる。空は高々と青く、日中は丁シャツでも汗ばむくらいだ。

「モネ！　あなたはまだ、見ていないでしょう。この間の雨で、キャンパスに忽然と大きな湖ができてしまったのよ。さすが、アメリカねえ。わたし、もう、びっくりしてしまって……。雨が降れば湖が出現するんだから！」スコットランドから来たアンナが声をかけた。

「そうだ！　モネも行って見ないか。彼もつれて来いよ。ヨットで遊ぼう、毎日賑わっているんだよ、思い出にはなると思うな」デビッドがさそった。

「それ、ほんとの話なの？　担いだら嫌よ。その辺りって、確か、砂漠のあったところじゃないの？　そんな気がするけど？」

「当たり！　それ、それ、その砂漠が湖になってしまったんだよ！」

「何時また忽然と消えるのかわからないから、見ておきなさいよ。水深だって十メートルはあるとかいっているよ」アンナがけしかける。

モネはセコイヤ・タワーの前で杏平と待ち合わせる。この間ふたりで駆け回った広大な砂漠が、湖

に一変している。ふたりは唖然として湖のほとりにたたずんでいた。水を満々とたたえた、コバルト色の湖面に、ヨットや、ボート・セービングの色とりどりの帆が走り回っている。

夢かと疑うばかりの鮮やかさ。あっちでも、こっちでも、三角の帆が倒れ、湖に溶け込んでいた。……彼方の丘に、二、三艘のボートが寝ていた。モネはボートに衝突したように飛び上がり、杏平を振り返る。杏平の頭もアンテナを張り巡らし、何かを探って緊張している。彼の目が黒い鉄骨の飛び込み台にからまる。執拗に絡まってから、リールがはじけたように丘に寝ているボートの上に飛び乗った。

「まさか、あれは、サンフランシスコ・ベイに捨てたんだ」どこにあっても警戒の念を緩めない彼の不幸。

デビットがヨット・ハーバーの方に車を走らせながら、二人に手を振った。杏平は一瞬救われたように快活になって、デビットの方に車を走らせる。帆を張り、デビットと杏平はテイラーとシートを操り、モネはアンナとベンチに腰をおろし、足を恐る恐る伸ばした。彼らのヨットは白い帆を張りつめ、たわませて走っていった。右手に黒い鉄骨の飛び込み台が近づいてくる。ヨットが水中の何かにぶち当たって軋んだ。杏平がモネの手を痛いほど握りしめた。ジョーの死体。モネの足が死体に触れたように縮みあがる。

……あれはサンフランシスコ・ベイに捨てたんだ。……あの日は一寸先も見えないほどの豪雨だった。道に迷ってもいた。この湖を湾と間違えてもおかしくはない。二人はこの湖の存在を知らなかったのだ。

ボードセービングのボードが沈んだまま浮かんでこないのがある。沈んで彼らは何を見るのだろう。水底にあるものは……あの死体……。ひとりやふたり死ぬ者もあるだろう。

水死体の捜索が行われたとしたら、網に引っかかってくるのはジョーの死体だ。

「モネ、どうした？　震えているの？　風邪でもひいたのかな？」デビッドが心配そうにいった。

「大丈夫だよ」杏平が悪夢を断つようにデビッドと位置を交替した。

「楽しいことだけを考えていよう。な、大丈夫さ」

「浮かんではこない」杏平は最後の言葉を日本語で言った。

モネは胸一杯に風を吸い込んでから、人目を憚るように、そっと、溜息を吐き出した。

デビッドが慰めるように、イスラエルの歌をうたった。湖の歌だと彼はいった。アンナと二人でハミングする。杏平も不意に仲間入りした。民族の哀愁が感じられる、デビッドは優しい。アンナがモネの肩を抱いた。アンナはいい匂いがする。

これは、幻の湖。すぐに消えて砂漠に戻るだろう。そのとき、砂漠の上にはジョーの死体がある。

ない。杏平は記憶を探っていた。水温は思ったより暖かかったし、水は塩分もなかった。入り江だと思ったのはこの湖だったのだ。ジョ―の死体は湖の中央まで流されているのだろうか。いまだに浮上しないということは、永遠に浮上しないことだ。といっても、いつかは湖の水が涸れる。三十八年来の雨水がどのような速度で気化するのか。水量、気温、表面積と、その後の雨量との関係。

上の丘から樹々が湖の上にのしかかって来る。ヨットは微妙な均衡を保って、カルフォルニアの陽光のなかを走っていた。あのとき、ああするほかに、どんな方法があったのだろうか？　軽率。杏平はその意外性にびっくりする。たとえ、警察に届け出たとしても、殺人罪をまぬかれる確率はどれくらいあったのか。絨毯にも点々と血痕がついていたのだ。あの状態では、犯人は確実に杏平の名前だった。

対岸を一人が走っていく。三人が走った。突然、湖面に皺が寄るように、ボートが不自然に動き出した。

「どうしたんだ？」

「ボートに何かひっかかったらしいぞ！」遠くで誰かが叫び、

「水死体か？」耳元でデビッドが呟いた。

吼えるでもなく、うめくでもない為体の知れない声が杏平の喉元を押し上げる。モネが黙って杏平

を見た。二つの瞳が危険を予知して動転している。
ジョーはボートにとりつき、秘密を暴こうとして浮上したのだ。
警察の回転灯の赤い光とサイレンが近づいて来る。デビットが帰り支度をしながら、解説を加える。
「多分、失望した留学生ですよ。大統領が大學の助成金を大幅にカットしたおかげで、帰国をよぎなくされる留学生がとても多いんです」
「そうなの？」モネは顔に微笑を着込んでから、必死に合槌を打った。
岸に上がると好奇心が押えられなくなったデビッドはモネとアンナを乗せ、人垣に向かって車を走らせていく。モネは頭が混乱している。男より女の方がしつっこく望みを持ちつづけるのだ。ジョーでないしるしを求めて。
杏平は一瞬ためらってから、危険を測った。ダイヤモンドの所有、所有は盗みだ。二人の世代ともう一代生きるに充分なだけのものを持ち帰ろうとしている。掴まったら死体遺棄罪、間違えば強盗殺人罪になる。どうなるにしてもモネだけは自分の責任として日本に送り届けなければならない。怖気づいての失敗は許されないのだ。
「黒人だ、大分腐敗している」すぐそばで誰かが叫んだ。死体の上で、物見高い野次馬の手で、シートがめくられていた。モネが怯えきって、杏平の腕を締め付けている。二人は逃げるように車に走っ

た。ドアがバタンと閉じる。エンジンがかかった。ギアを入れた。ハンドルを一杯に切る。もうすぐ、この車を追って警察車が走り回りあらゆる道路を封鎖するに違いない。杏平は死に物狂いでアクセルを踏んだ。

M大學では毎週レポートを三つは提出しなければならない。モネはうかうかしているわけにはいかなくなっていた。ショックから立ち直らなくても、レポートは書かなければならない。パソコンの手を休めるわけにはいかなかった。しかし追い払っても、追い払っても、ジョーの腐乱した顔が瞼に浮かんでくる。モネはジョーの顔の上にパソコンのキイを打つ。突然痛みを感じる。殺さなくても、もっとやり方があったのかも知れない。あの時点で救急車を呼んだら？　ジョーは失業者の多い若い黒人であって見れば、生きるために犯罪者の手先になってしまったのだろう。ローザが老人殺人グループの首領だったとは……。ここは彼らのアジトだったのだ。モネは頭を抱え込んだ。気分転換にラジオのスイッチを入れた。

「さきにM大學キャンパスの湖から、黒人の腐乱死体が発見されましたが、着衣のイニシアルなどから、ボヴ・ウイリアムズ殺害で指名手配中のジョー・ルースであることが判明しました……」

ニュースは流れていた。モネは慌ててラジオを切る。床を這いクローゼット前のしみをあらためてしまう。処置をしたのだから、ルミノール反応は出ない。筈はないのだが？　モネは冷蔵庫の卵四個を並べ替えた。どんなに頭のなかで詭計を廻らし、他人を欺こうとしても、自分自身にそれを忘れさせることができなければ、いずれ墓穴を掘ることになるのかもしれない。

「あのとき、懐中電灯を落としたの、大丈夫かな？」モネは心配を口にしてしまう。

「あれは、製造番号がついていたかもしれないが、世界中何処にでも売ってるものだよ。大丈夫、大丈夫！」杏平が陽気にはしゃいでみせる。

いずれにしても、犯人がつかまり、自供した場合、死体を湖に捨てた死体遺棄罪は免れない。いや殺してはいないと言うだろう。殺したのはわたし、強盗殺人罪をせおっているのだ。杏平まで巻き込んで……。いくら冷静でいようと思っても、震えはモネを根底から覆してしまう。

杏平が気分転換をはかるようにテレビのリモコンに手をのばした。

「ヘヴン連続殺人事件主犯、ヘンリー・ウイリアムズ逮捕。仲間割れしてジョー・ルースを殺害！」ニュースの字幕が踊っている。

「ジョー・ルース殺害事件を捜査中の特捜本部はヘンリー・ウイリアムズ、仮名、グレアム・ペイジ、二十五歳。ウイリアムズ・ハウジング新社長をヘヴン殺人事件主犯、及びジョー・ルース殺害の容疑で逮捕した。ヘンリーはさきに逮捕されたカウンセラー、ローザ・チェスターが美人で優しく老人に信望のあるのに目をつけ、一人暮らしの富裕な老人の財産を奪い取ることを思い立ち、ローザを老人に近づけ信頼を得たところでジョーと、ローザの従妹、バーバラ・チェスターを仲間に強盗連続殺人事件を計画、犯行を重ねてきたことが、ローザとバーバラの自供により明らかになった。先のヘンリーの父、ボヴ・ウイリアムズ殺害は、ヘンリーの指示により、自宅にジョーとバーバラを侵入させ、ジョーに父親を殺害させ、財産を独り占めにし若くして社長に就任したものであると、ジョーの死体発見後、バーバラは自供している。グループで隠している財産は膨大なものと推定され、戦利品の分配について争いが絶えなかった。今回も宝石の隠し場所から疑心暗鬼になり、ジョー・ルースをヘンリーが殺害したものと推定されている。なお、チェスター―従姉妹は、ここにきて、ヘヴン及び一連の事件はヘンリーの犯行であって、自分達は利用されたに過ぎないと大きく供述を変更させた」

杏平が背後からモネをしっかりと抱きとめた。

「大丈夫だ、僕がついているから！　そうじゃないか、ネモがついているから、大丈夫なんだな！　さあ、笑ってごらん、そう、これからが冒険なんだよ！」

二人の愛の巣は次々に汚されていく。ドアを勝手に押し開けて、三人の捜査官と手錠をかけられたヘンリー・ウイリアムズが入ってくる。現場検証だ。

ヘンリーの顔はボヴによく似ている、父親は息子を愛していたのに、ヘンリーが帰ってくるとあんなに喜んでいたのに。もしかしたら、離婚したのも、ヘンリーが原因だったのでは……。父親より痩せてやや小柄、女のような甲高い声を出した。

「殺してから此処にジョーを運んできたんだな」刑事がヘンリーに念を押した。

「違う、あれは嘘だ。本当は此処で奴を刺した。しかし、おれが出て行く時まだ奴は生きていたんだ。本当だよ。こいつらが止めを刺したに違いない」

ヘンリーが杏平を見て含み笑いをした。ローザを乗せてキャデラックを乗り回していたのはこの男だ。捜査官が血痕を捜している。ヘンリーは引き立てられてベッドルームに入っていった。衣裳ダンスを調べている。二人は息を呑んでリビングルームで立ち尽くしていた。

「本当はこいつらがジョーを殺したんだ。ここからM大學のキャンパスの湖に捨てたんだよ。こいつらのやりそうなことじゃないか。俺なら、同じ捨てるんなら、ベイに捨てるさ。そんなドジは踏まないよ。あそこはいずれ干上がるんだ。刑事さん、ジョーを殺して捨てたってことは、ダイヤをこいつらが持ってるってことですぜ！　あれは凄いものなんだ、ジャップなんかに盗られてたまるかよ。アメリカ警察の名がすたるぜ！」

刑事の鋭い目が杏平の目とかちあう。

「参考のために」と刑事がいった。

「ローザ達のパーティの後で、家宅捜査をしたとおっしゃったじゃありませんか。ヘンリーは自分の罪を逃れるためになら、なんだっていうんですよ。何回やっても同じでしょうが……。いいですよ、どうぞ、徹底的に捜して下さい」

自信はあったが、ふっと新たな不安が杏平の頭をよぎる。サンフランシスコのパーティでモネがした指輪のことが誰かの口から警察に知らされたのかもしれない。あれは余りにも迂闊過ぎた。杏平の体中を白い裂け目が走っていく。

刑事が冷蔵庫にとりついた。どう思ったのか、モネが突然走り寄っていく。馬鹿な、そんなことをしたら、なにもかも終わりだ。杏平は目を閉じる。

そのとき、「ペシュッ」卵が一個音をたてて床に落ち、モネは杏平を振り返った。
「コーラでもさし上げようと思ったのよ」
「ご心配なさらないで下さい。それより邪魔をしないようにお願いします」刑事が白い目をむいてモネを見た、刑事が目をしばたたいている。
卵の割れるのを恐れたのか、それ以上刑事たちは卵に手を触れなかったが、レタスの葉の一枚一枚から、ピーマンのなか、葡萄の一粒一粒。製氷皿の氷にまで抜け目のない調査を繰返した。果ては、冷蔵庫の裏や底を探り、機械の中まで点検する。
「こんなところで、手数ばかりかけないで、早く殺人現場にいくんだ！」
たまりかねた刑事にヘンリーが引き立てられていった。
助かったのだ。杏平は暫らく茫然と立っている。モネの腕が杏平の首に巻きついてきた。そのとき、
「任意同行願いましょうか」刑事の冷酷な声が耳元でした。

夜になっても杏平は戻らなかった。翌日の昼になっても帰らない。時計は午後三時をさしていた。杏平がいなくなっては何もかも終わりだ。彼の存在にくらべたらダイヤなど、なんと微々たるものに過ぎないのだろう。

こうしてはいられないのだ。本当に刑罰を受けるべき人間はモネ自身なのだから。わたしにはもう、日本で待っていてくれる母もいない。でも、彼にはわたし達の唐突な結婚宣言にも、慈愛深い目で許してくれた優しそうなご両親がいる。

モネは身支度をした。それから、ビニールの袋に卵を四個包んでハンドバッグに入れた。何もかも自分ひとりでしたのだと告白しなければならないのだ。このままでは、杏平はM大學の客員は勿論、日本での職も追われることになる。急がなければならなかった。モネには他に失うものはないのだから。

バス停までモネは下を向いて歩いた。涙が頬を伝い、靴先がぼんやりしていた。誰かの靴先に衝突した。靴はじっとしている。モネが右に避けると、その靴も同時に動いた。嗚咽が堪えきれなくなって、涙の目を上げると、そこには杏平が立っていた。

「証拠隠滅の形跡があると突っ込まれたが、雨漏りの後だしね。死体遺棄といわれても、大學のキャンパスに湖があるなんて全く知らなかった、砂漠だとおもっていたから、死体を捨てにいく筈がない

と言い張った。目には目をだよ。ジョー殺しの現場である、車が発見されたんだ、でなかったら、今頃どうなっていたかわからない。ナタリーはヘンリーではなく、バーバラに殺されたんだ。よく気のつくナタリーは彼女達を疑い、警察に通報するといったらしいよ」

「ナタリーらしいわね、口に出さないでいたら、殺されることもなかったのに……」モネが身震いした。杏平がナタリーの声色をまねて歌い出した。

「……命みじいかし、恋せえよ、乙女、あかき唇、ああせえぬまに……勇敢だったよなあ、僕、ああいう人、好きだったなあ。……あかき唇、あせぬまに……」モネも声を合わせた。ナタリーの派手なドレス姿が芝生に舞い降りる。ポリスごっこをしていた子供たちが逃げ惑っている。

「ヘンリー達起訴されたんですって。近所の子供達がしらせてくれたわ。あの子達、わたしに注意するようにと、危険信号を送ってくれていたのに。わたしは理解出来ないでいたのね。どうしようもないお馬鹿さんだって、そう言っていたわ」

「ネモは、子供にももてるんだねえ。知らなかったな！」杏平が大袈裟に拗ねて見せる。

「ようやく、人心地がついてきたみたいね」モネが肩をすくめた。

研究と論文提出に追いまくられて、事件は密封されたまま、後半の日時は驚く程の早足で過ぎて行った。帰国を前にして二人は荷物の整理をはじめる。

「モネっていう名前のことだけど、それって、蓮池のモネからとったんだろう。よほど、モネの絵がお好きだったんだろうな。多分、お父さんだろう？」

「はずれ！　みんなにそういわれるわ。だから、そうよっていっておくの。でも本当はアネモネのモネなの。家のお父さんはね、なんとなく、音が可愛いって、双子の姉妹にアネ、とモネってつけたんだけど、アネはすぐに死んでしまって、モネだけが残ったってわけ。アネも早く死んで正解よ。姉のアネですなんて可哀想過ぎるわ」モネが恥ずかしそうに笑った。

「そうかあ、アネモネちゃんか。可愛いよ、越えてるね、お父さん」

「越えてるもんですか、アネモネって花見たことないから、そんなこと言っていられるのよ。花なんていえないみたいな、野菜みたいな、不細工な花なのよ。丈は短く、図太くて、菜っ葉みたいな葉にオレンジ色の花が中央に咲くだけ。仏壇花なんです。小さい器に活けるのには、安定感があるんじゃない。わたし、それを知った時悲しかったわ。わたしの人生、薫りも、夢もないなって信じられたも

の」モネが思い出したように大袈裟に肩をおとしてみせる。
「でも、ぼくは好き」必要でなくなった本やノートを包みながら、杏平が笑った。八年間モネは父親の話をすることはなかったし、杏平も遠慮して避けてきたのだ。モネが心を開こうとしている。それが杏平には嬉しかった。
二人は荷物を、航空便と、船便に分ける。一つは最良の方法として船便にし、送り主欄にM大學名の印刷された用紙を貼って包装し、経済学研究所の榛名杏太宛に送る。中に消しゴムを繰り抜いて指輪をもぐりこませた。個人の住所あてでは中身を改められるし、手で持ち帰る自信はなかった。何度か荷物を送り込み研究済みだから、間違いはない。
二人は幸運にも、異常な緊張感のなかで、これからの研究課題をものにしていた。一生をかけるに足る研究の手掛りを、この経験のなかで、おまけのように把握したのだ。大學にいっても憑かれたような熱気が二人を取り巻いていた。期待と嫉妬。引く手あまたの送別パーティが、連夜開催され、日本に帰る前日までつづいた。お蔭で感傷にひたっている時間も、恐怖や、事件をを引き寄せる暇もなかったのだ。ナタリーの歌声も遠くなっていった。

「モネ！　杏平！　帰国おめでとう！」
空港に雑誌編集者のミセス・ミューラーが見送りに来ていた。今度こそ絶体絶命なのかもしれない。苦難を潜り抜け、二人揃って日本に戻れる。……モネにはそれが信じられなかった。もう少しだった。しかし着く前に災いはしっかりと用意されていたのだ。
「わたし、パーティの、モネの美しさが忘れられない！　同じ姿を何時かカメラでとらせて欲しいの」ミセス、ミューラーは熱を込めていった。その口から、もうすぐ、エメラルドと、ダイヤがとび出して来る。警官も配置に着いた頃だ。モネは背骨を緊張させて待っていた。用意は出来ている。そのとき、杏平がモネを庇うように前に進み出た。
「それは僕から……」人波が崩れて、乗客が走り出した。ふたりは流れに呑み込まれる。
「ああ、ごめん、ごめん、時間だわね。ありがとう！　またお会いしましょう！　きっとよ！」振り返るとミセス・ミューラーの長い腕が、熱烈に振られているのが見えた。
危険を時間が救ってくれたのだ、ふたりはタラップを駆け上がった。
二つの国ではまだ犯人の共同捜査協定はできていない。

「ふたりとも何だか変身したみたい！　少しやせて、人相も。モネさんはなんというか、こう、この世のものでないって感じだし、杏平も凛々しくなって！」出迎えの杏平の母が涙ぐんだ。
「荷物、つきましたか？　船便で送りましたけど……」杏平が気がかりを口にする。
「ああ、杏平の希望通りにしましたよ。研究所にいって受け取って、ついでに整理しておきましたよ」
旅行鞄を引っ張りながら杏平の母がいった。
「ああそうだ、素敵な模造品の指輪が手に入りましたのね」杏平の母がモネを振り返った。杏平の顔が生き返ったように明るくなる。イミテーション。
「それでいこう」ふたりは顔を見合わせ、肩を抱き合って笑った。何ヵ月振りかで心から笑ったような気がした。モネの笑顔……。
もしかしたら、杏平は思った。ダイヤやエメラルドの輝きを借りなくても、パーティでモネは充分に美しかったのかもしれない。

完